
最高の彼女

ラーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最高の彼女

【Nコード】

N2288N

【作者名】

ラーさん

【あらすじ】

オレの高校時代からの女友達である御堂美咲は、だいぶアレな不思議ちゃん。今日もオレは美咲に付き合わされて千羽鶴を折ったり、空き缶を積み上げたり……。そういう日常にすり減る時間に学生の残り時間は減っていく、さてさてオレは何がしたいのやら……。

短期集中連載 全十三話

第一話「千羽鶴」

「つまんない」

大学の学食で向かいの席に座る御堂美咲は、友人の木島守人が地面に落ちた大福を三秒ルールで拾い食いし、腹を壊して入院したというオレの爆笑トークを冷めた声で一蹴し、冷めたサンマ定食を箸でこね回して遊んでいた。

「つまんないかな、三秒ルール」

「つまんない」

美咲が自慢の艶やかな長い黒髪を左手の親指と人差し指でいじり出すと、それは退屈のサインであると、オレは長い付き合いから知っていた。

「退屈」

「どっか行く？ カラオケとか、ボウリングとか」

「つまんない」

美咲の箸はサンマをぐちゃぐちゃに解体し、目を潰して目刺しにしていた。オレはビリヤードとか映画とか動物園とか遊園地とかいろいろな提案を試みたが、美咲は乗り気にならずにサンマ潰しをだらだらと続ける。

「何したいんよ？」

いい加減イライラしてきたので不満気な美咲の顔に不満気な顔でオレが訊くと、美咲は箸を少し止めてオレを見て、意外に真面目な顔で答えてきた。

「秀雄くん、おもしろいつてなんだろう？」

「はあ？」

「よく、大変だけどやりがいがあつておもしろい仕事って言っじゃない。でも逆にさ、大変じゃなくてやりがいもないけどおもしろい仕事って話はあまり聞かないよね？」

「うーん、そうだなあー」

「それってやつぱりさ、大変じゃないとおもしろくないってことなのかな？」

「知らんわ、そんなん」

「じゃあ、やってみよう」

何が「じゃあ」なのかオレにはさっぱりわからなかったが、美咲は席を立てて学食を出て行ってしまったので、オレは彼女の残したサンマ定食を慌てて片付けて、急いで彼女の後を追いかけた。

高校の同級生で大学もオレと同じところに進学した御堂美咲は、昔から不思議ちゃんで何を考えているのか掴めない女だった。授業中には得体の知れない曼荼羅を延々と机に描き続け、掃除となると黒板消しのチョークの粉が完全に出なくなるまで自宅に持ち帰って三日三晩叩き、京都での修学旅行の自由行動では名古屋へきしめんを食べに行き、全校集会では呼ばれもしないのに勝手に朝礼台に上って先生たちに引きずりおろされるなどの数々の伝説を持っていた。そんな奴だから当然友達も少なく、付き合いのある友人はオレを含めて二、三人といったところだったが、それで何でオレがそんな美咲の友人をやっているのかというと、考えの読めない美咲の言動に付き合ってみるのが、これが意外とおもしろかったからである。

そして今日もオレは美咲の奇行に付き合う。

オレがやっそこ美咲の背中に追い付くと、彼女は校内の文具屋で折り紙を大量に買っていた。

「何すんの？」

「千羽鶴」

それは確かに大変だった。

空き教室の片隅で、授業もサボって延々と鶴を折る男女の異様。何故かオレも鶴を折る。

美咲が喋らないので、オレも黙って鶴を折った。

黙々。

翌日。

黙々。

翌々日。

黙々。

三日目にして折り鶴の境地に至る。

無我。

黙々。

完成。

夜の大学の片隅に、十色の錦に織られた千羽の鶴が、美咲の手に高々とぶら下がった。

千羽鶴。

オレはなかなか感動していた。

美咲は言った。

「あんまり、おもしろくなかったね」
そりゃないぜと思った。

第二話「ピラミッド」

「やっぱり千羽鶴って、折る目的がないとダメなんだね。疲れるだけだ」

そんなわかりきったことを三日も折り続けて完成させてから言い出す美咲は、相変わらずの不思議ぶりで、次なる奇行の準備をしていた。

初秋のよく晴れた気持ちのいいキャンパスの一角で、オレたちは空き缶を積んでいた。

「そこ、もうちょっと詰めて。バランスが」

「こっか？」

ゴミ箱やらから勝手に拝借した空き缶約七百本をアスファルトの地面に転がして、木の板を敷いて水平にした土台に空き缶を十二×十二で並べて底辺を作り、その上にピラミッド型にオレたちは空き缶を積んでいった。

「うーん、風が、揺れる」

遠くに囲む奇異の目を美咲はまったく気にせずに、作業に邪魔な長い黒髪を後ろに結い上げ、空き缶を一つずつ丁寧に積んでいた。まあ、大学というのは大概変人の巣窟で、この手のパフォーマンスクずれの行為は構内のあちこちでちらほら見られることなので、オレも気にせず空き缶を積んでいく。

「やっぱ、屋外ってのは難しくないか？ …… あっ」

ガランガラン。

澄んだ空気にそよ吹く風は空き缶ピラミッドの大敵だった。

四段目で崩れた空き缶が空っぽの音を立てて転がった。

「やっぱ、難しいって」

「エジプト人は偉大だね」

そのピラミッドとは無関係というかむしろ失礼だろうと、この力ラフル過ぎて汚く不細工な空き缶の集合体を拾い集めて、オレたち

はまた積み直す。

「日が暮れちゃうな」

「秀雄くん、授業いいの？」

「いいんじゃないの？」

「ならいいや」

よくはないが途中で投げ出すのもよろしくないと、オレは空き缶を積んでいった。

「接着かなんかした方がいいんじゃないか？」

「接着剤？」

「セロハンテープとか」

「それはやだな」

「なんで？」

「崩れなくなる」

それが目的やんけと思ったが、美咲は頑なに受け入れないので、オレはひたすら空き缶を積む。

集中力。

指先に伝わる神経。

微細な振動に耐える空き缶。

それは徐々に形になる。

ピラミッド。

「できた」

日暮れの斜陽に赤く燃え、それは銀色の姿を現した。

ピラミッド。

座って下からそれを眺める。

ピラミッド。

人の背丈ほどもあるそれは、脆く弱く繊細で、それでいて強く雄々しく逞しく、みすばらしい姿を赤々と晒していた。

「それでどうすんの？」

オレは訊いた。

結った髪を解いた美咲は、重そうにボストンバックを運んできた。

そこからボウリングの球が出てきた。

美咲は構え、空き缶ピラミッドを見据える。

オレが止める間もなく、美咲は投げた。

転がさないで投げた。

黒髪のたなびき。

放物線を描いた球は斜め上四十五度からピラミッドに直撃し、全部を崩して叩き壊した。

グワシャアッ

ガラランガラ

ゴスン。

派手に高く鳴った金属音にボウリング球の鈍い音が低く鳴る。それは何事かが起こった音で、何事かが終わった音だった。

耳目集中。

散乱する空き缶の前に美咲だけが立っていた。

夕方の閑静なキャンパスに人のざわめきの連なりが起こり、それがオレたちに集中する。

オレは美咲の顔を見た。

不満気だった。

「あ、ヤバイ、職員が来た　　って美咲！」

騒ぎにやって来た大学の職員を見て、美咲は脱兎の如くに逃げ出した。それを見て職員たちも駆け出した。

「ちよっ、置いてくなっ！」

「待てっ！」

追われれば逃げる。逃げれば追う。これは人間心理の絶対である。けれど一動作遅れて逃げたオレは早々に捕まって、美咲もそんなに足が速くないので結構簡単に捕まり、それでオレたちはこっそりしつかり絞られて、深夜遅くに解放された。

「先に逃げるってヒドくないか？」

「だって、顔が怖かったんだもん」

郊外型キャンパスといえば聞こえはいいが、終電も早ければ周り

にも畑と林ぐらいしかないうちに深夜に解放されたオレたちは、行くあてどなくさもしく小さな駅前をフラフラと歩いていった。

「朝までどうする？」

秋の夜は冷たく静かで、虫の声だけが鳴っている。

「焚き火をしよう」

駅の前に一軒だけのコンビニでライターと新聞と酒とつまみを購入し、廃材置き場に風除けになりそうなトタン壁を見つけると、新聞を火種にしてそこから集めた落ち葉やら廃材なんか火をつけた。

焚き火。

ゆらゆら。

「焚き火なんて初めて」

「こんな近くで炎を見るのは、キャンプファイヤー以来だな」

中学の林間学校でキャンプファイヤーを囲んで、フォークダンスをして、「燃えろよ燃えろ」を合唱したことを思い出す。

もーえろよ、もえろーよー ほのおよもーえーろー

ひーのこをまきあーげー、てーんまでこがせー

焚き火の揺らぎ。

ガスコンロの火とは違う赤く揺れる熱い炎は、オレたちの顔を舐めるように自由自在に手足を伸ばし、じりじりと肌を焦がす。

赤い影に映る美咲の顔。

美咲は焚き火をじつと見ていた。

オレは新聞の残りを焚き付ける。

新聞が燃えると、それは新聞ではないものになっていき、最後に新聞だった何ものかのカスになる。

文字が燃えて焦げる瞬間。

読めなくなる。

火の粉。

昇る。

炎。

じつと見る。

昇る。

炎。

「今日はこのまま野宿？」

オレの声に焚き火から顔を上げた美咲は、かわいらしく首を傾げる。

「飲も」

美咲はとりあえずそう言って缶ビールを開けたので、オレも缶ビールを開けて二人で小さく乾杯した。
ポテトチップスとイカジャッキー！。

ビール。

炙るイカのイカ臭さ。

ビール。

オレは訊いた。

「今日のアレって、なんだったんだ？」

丸一日あんな空き缶積みを手伝っておいで、今さらこんな質問をするオレもマヌケだが、それに答える美咲の返事もなかなかマヌケなものだった。

「なんだろう？」

真顔で言う美咲にオレは脱力した。

「おいおい」

「うーん、そうだねえ」

美咲は本当に困った顔をして考え込んでしまった。

「アレって、最初からぶっ壊すつもりだったの？」

「うん」

即答だった。

「だって、壊さないと片付けられないし」

美咲は子供のブロック遊びを引き合いに出す。ブロックで立派なお城とか作っても最後にはお母さんに分解されて片付けられちゃうじゃない。それはそうだが、なんというか甲斐のないことにオレは

少しげんなりした。

あの空き缶、洗うのだって相当苦労したのに。

「じゃあ、あのボウリングの球は？」

「叩き壊した方が気持ちいい」

美咲は笑顔でそう言った。

単純明快。

だから空き缶を固定するのに反対だったのか。

「なんというか無意味な」

「そうだった？」

オレがぼやくと美咲は眉を寄せて訊いてきた。

「だって、壊すために作ったんだろう？」

「うん」

「意味ないじゃん」

「でも、みんな騒いだよ。怒られたし」

「そりゃ、あんなだけデカイ音を立ててればなあ」

「千羽鶴は？」

「あれも無意味だったなあ」

「でも、千羽鶴は残ってるよ」

「ううん？」

オレは美咲が何を言いたいのかわからなかったが、何かを言いたいという顔をしていることだけはなんとなくわかった。それは美咲にもよくわかっていないことなのか、言葉を探す美咲の表情は、まとまらないでバラバラに動き回った。

「千羽鶴を折ったとき、折る目的がないとダメだって言ってたじゃん。目的のない千羽鶴ってのは無駄だったんじゃないのか？」

「うん。無駄だよ。無駄なんだけど……でも、無意味にはならなかったって言うか、意味があるってわけでもなくて、無駄なんだけど、でも無意味にはならなくて、もっとなんか、こう……なんかね、なんかなの」

「なんだよ」

美咲は黙ってしまった。

焚き火。

オレは廃材を焚き付ける。

爆ぜる音の熱の勢い。

美咲はまた焚き火を見つめる。

火の揺れに瞳を揺らす美咲の顔の揺らめきは、火影の中に浮かんで沈み、また浮かぶ。炎の動きはどうしようもなくバラバラで、定まらないで固まらないでゆらりゆらりと姿を変える。それは踊っているようにも見え、踊らされているようにも見え、楽しそうにも見え、苦しそうにも見え、暴れているようにも見え、悶えているように見える。

あの空き缶ピラミッドをぶち壊したとき、美咲は物足りない顔をした。

あれがなんかなんだろうな。

ビールを飲み干す。

空き缶。

からっぽだ。

風が吹き込んだ。

「さむっ」

炎は風に身を竦め、たなびき耐えて、また燃える。

顔の熱気と背中中の冷氣。

「本気で野宿？」

美咲がちよつと目を上げる。

「だって、帰れないじゃん」

「近くに住んでる奴に泊めてもらおうぜ」

「誰かいたっけ？」

「木島」

「ああ」

美咲はそういえばそんな奴もいたねといった感じにうなずいた。

第三話「木島の部屋」

深夜も三時を過ぎた時間にオレたちは、木島守人の部屋の扉をノックした。

「てめーら、見舞いにもろくに来ないくせに、都合のいいときだけ顔出しやがって」

木島守人の住んでいる2DKのアパートは、大学近くの畑の中に建っている。風呂とトイレが付いて家賃三万八千円という郊外つぶりの、貧乏学生には頼もしい築二十年のアパートだ。オレたちは木島を叩き起こして部屋に上がり込むと、ぶつくさ言う木島をなだめながら、勝手に押入れから冬用の毛布や夏用のタオルケットなんかを取り出して、枕になりそうなものを探しながら、散乱するゴミをどかして寢床スペースを確保する。

「人の家で勝手に布団まで敷くしよお」

「いいじゃないの、秋の夜長に独り寂しくしてんじゃないかと思つてね、良き友達の心遣いってもんじゃないの」

「良き友達なら、独り寂しく家で腹を下していたときに見舞いに来るもんじゃないのか？」

「友達の善意は素直に受け取るもんだよ。それで食あたりはどうだった？ 落としたもんは食うんじゃないぞ」

「大丈夫だよ。今度は二秒で拾ってやるから」

「それなら、落ちてる途中に空中で掴め」

「なるほど」

「ってか、落とすな」

「おお」

「おお、じゃないだろ」

「いやいやなるほど、確かに落とさなきゃ拾わなくて済むもんな。ほら、俺よく食べてるときに食いもん落としちゃうじゃん？」

「そんなん知らんわ」

「じゃあ今知れ。それで俺はよくお袋に……あ、美咲ちゃんそこ触らんで」

オレと木島がアホな会話をしている間に、寢床を求めて部屋の隅でゴソゴソやっていた美咲は、テレビの脇に置いてあったダンボールを見つけて中をガサゴソやっていた。

「エッチいのばっかだね」

「そこは男の聖域だ。文句あるか？」

「巨乳ばっか」

「趣味だ」

木島は堂々と男らしく言い切った。

「ふーん。じゃああたしには興味ないんだ」

「胸には」

木島は正直者のいい奴だった。

「秀雄くんは？」

「えっ」

「胸」

美咲の胸は大とは言えず、小とも言えない程度にはあったが、どちらかといえば小に含まれるんじゃないかという微妙さというか、そもそも女性の胸は案外ブラジャーやらパッドやらで形を作っているの、直接見ないとどうなのかとは言えないなあ、というようなことをたっぷり五秒ぐらい考えていたら、木島に背中を思いっきり叩かれた。

「どうした梶井い、照れたかあ？ まったくこいつはウブだねえ」

「違うわ」

「そんなこと言っちゃって、興味津々な癖に。このムツリっ！」

木島がニヤニヤと笑いやがるので、オレは言い返してやろうとしたが、その前に美咲がうなずいた。

「ふーん。そうなんだ」

「おい、勝手に納得するな」

「じゃあ、見る？」

何が「じゃあ」なのか相変わらずわからないが、こいつはいつもこういう迂闊なことをホイホイと言いのける。

オレの口が止まり、さすがの木島も動きが止まった。

沈黙。

「だ、誰が見るかっ」

うわずった声が出て、オレはとても情けない気持ちになった。

「ふーん。じゃあいいや。木島くんお風呂借りるね」

「お、おう」

美咲は平然とした顔でスクツと立つと、サツと歩いて風呂場に消えた。

「すげえなあ」

「困るわ」

木島の感嘆のため息に、オレは苦い顔で応える。美咲はよくこういう迂闊なことを簡単に言ってしまつて自分の姿を女に変える。それでそれに乗った男といい加減になつてしまい、それが他人の男だったりもするものだから同性から嫌われて、さらにもともと根が掴めない女だから結局そんな男どもとも長続きしないので、最終的に周りに男も女もいなくなるなんてことが何度もあつて、オレは何度か忠告したが、美咲は相も変わらずそういうことを平気で言う。

「だから友達少ねんだよ、あいつ」

「なるほど」

「どこまで本気かもわからん」

「冗談じゃねえの？」

「それもわからん。ただそれに乗ると冗談じゃ済まない」

「怖いなあ」

オレもまったく同感だつた。普段はただの変わり者の友人なのに、「見る？」の一言で女に化けて、オレはオレで男に変わる。

男女という言葉。

怖い話だ。

シャワーの音。

「ところでおまえら、こんな何もないところでこんな時間まで何やつとたんよ」

木島が今更ながらの疑問を訊いてきた。

「ちよつと大学で怒られてて」

「何したん？」

「空き缶ピラミッド」

「なんじゃそりゃ」

オレが説明しようとする、美咲が風呂から裸で出てきた。

「木島くん、シャンプーない！」

「石鹸がある！」

「髪が痛む」

オレは大声を上げた。

「タオルぐらい巻けっ！」

そんなわけでオレと木島はシャンプーとリンスを買いに行くことになった。

駅前のコンビ二に戻る途中の十分の道のり。

「椿オイル入りシャンプーとコンディショナー。高いんじゃないの、こつゆーのって」

「髪、きれいだもんなあ」

三時を過ぎた夜の道は寒さに震え、暗闇の底に電信柱の外灯がぼつりぼつりと光っていて、オレと木島はその下をトボトボと歩いていく。

オレと木島と虫の声。

「おまえもシャンプーぐらい買っとけよ」

「男だったら石鹸だろう」

「意味わからん」

木島のこだわりは独特で、やはり美咲と友達でいられるのはこう

いう人間だからなんだろうなと思っていると、木島は遠い目に記憶を浮かべながらしみじみと呟いた。

「しかし思ってたよりあつたなあ」

胸の話。

「83はあつたな。それにお椀型で形がいい。美乳だ」

オレは呆れた。

「よく見てるな」

「見えるのに見ないのは失礼だろう」

「それってセクハラじゃねえのか？」

「見たいくせに見ないのをムツツリと言う」

木島は常に堂々としている。結局こんな深夜まで何してたとか、空き缶ピラミッドってなんだとかいったことよりも胸の方に興味が移った木島は、その話をもう一度訊くこともなく胸の話を十分間し続けた。

「巨乳もいいが美乳もいいなあー」

木島のこだわりは独特で、こだわらないところも独特で、そんなところが木島らしい。

「美巨乳ってないかなあー。揺れるけど崩れないみたいナ」

胸の話がアホな願望に変わる頃、遠くにコンビニの明かりの四角く浮かんでいるのが見えてきた。

「いらっしやいませー」

深夜のコンビニの元氣のない店員の挨拶に迎えられてシャンプーを探す。木島は雑誌コーナーで立ち読みを始める。

コンビニの店員は二十歳前後の男の一人きりで、あくびをしながら棚の整理をやっていた。明らかにやる気なくて仕方なさそうに手を動かす姿は、今のオレは仮のオレで本当のオレじゃあないんだぜ、しょうがなくコンビニで働いているんだぜ、といった感じの雰囲気が出ていて、お疲れ様ですとオレは心中でねぎらいの言葉をかけた。

それでシャンプーー。

「ありがとうございましたー」

深夜のコンビニの元氣のない店員の挨拶に送られて店を出る。

帰る道も十分。

「やっぱ胸は90はないと。さっき雑誌で確認した。巨乳は美乳に勝る」

帰る道も胸の話。

「ただいまー」

「おかえりー」

部屋に着くと美咲はタオル一枚を羽織った姿で布団を被って座っていた。

「寒かった」

「服着りやいいだろ」

「だったまた入るんだもん」

そう言つて美咲はシャンプーとリンスをひつたくと、風呂に戻つて髪を洗つて帰ってきた。

「ドライヤーは？」

「押し入れ」

何故押し入れにドライヤーがあるのか不明だが、木島自身はドライヤーなんて使う性質の人間じゃないので、ドライヤーがあること自体にオレは奇跡を感じた。

「おまえドライヤーなんか使うの？」

「冬場は寒いからな。洗濯物もよく乾くぞ」

用途が違った。

「ハロゲンヒーターかよ」

「ドライヤーの方がハンディだ」

名前はドライヤーでもドライヤーではないそれを、美咲は気にせずドライヤーとして使う。バッグからブラシを取り出し、ブローブオー乾燥かしながら丁寧に髪を梳く。

「眠い」

手入れを終えると美咲は寝た。木島も寝た。オレは一人風呂に入

る。

膝を抱えてやっと入れるぐらいの浴槽のお湯はただの水になっていた。シャワーの栓をひねると最初は水で、徐々にお湯になっていく。湯気が浴室を満たす頃、曇った鏡に映るオレはぼやけた姿になっていた。輪郭を求めて鏡を擦ると、オレの顔が出てきて濡れた。

排水口に長い髪の毛が落ちていた。

オレは拾って見て流す。

オレは石鹸で髪を洗ってやった。

オレの髪の毛と長い髪の毛は一緒になって排水口に落ちていく。

第四話「海へ行く」

朝は昼にやってくる。カーテン越しに暖かい陽射しが部屋に入り込む時刻になって、オレと美咲と木島は起きた。

髭の伸びない朝はない。

寝起きの顔を鏡にのぞくと、乾かさないで眠った髪は寝癖に寝グレてグルグルしていて、ブツブツ生えた髭の無精は無粋に伸びてチクチクしている。木島の顔も寝起きにむくれて不細工で、美咲の顔にも腫れぼったいまぶたが重く乗って垂れている。そんなぼんやり顔の三人が冷たい水で顔を洗うと、不思議と寝る前とは別人みたいな三つの顔が、少しシャンとしてきれいになった。

オレは髭を剃って、寝癖を直し、美咲は髪を梳いて、化粧を施し、二人身綺麗に整えて、布団を片付け部屋を出る。

「また来るよ」

「いつでも来いや」

木島に見送られて駅へ歩く空は、秋晴れに秋晴れて雲が筋になって風を巻く。太陽は汗ばむほどの熱があつたが、風は肌冷ますほどの涼しさを持っている。かすかな風に車の走る音が遠く乗り、耳に触れて消えていく。

「お腹空いた」

美咲のお腹が小さく鳴った。

「どっか食べてくか」

「何時？」

「一時」

「学食でいいや」

オレはしょうが焼き定食を食べ、美咲は三菜そばをすすする。そばをすすする美咲の顔はそばの湯気でほのかに火照り、しょうが焼きを食べるオレはご飯が足りずにおかわりする。

「ごちそうさま」

食べ終わったので、家に帰ることになった。

駅のホーム。

お腹がいっぱいになって重いので、オレがベンチに座って休もうとすると、美咲も横に座って二人並んだ。

人影の少ない昼間のホームのベンチの二人に、ちよつと傾く太陽が日だまりに影を伸ばす秋の午後。

「天気いいね」

「そうだな」

そう答えると美咲は言った。

「どっか行く？」

電車が来た。

ガタゴト揺れる電車に揺られ、ガタゴトガタゴト終点に着く。海が見えた。

そこは特急列車でも行けるちよつとした観光地で、古い神社と小さな城跡とでつかい灯台に広い海がくっ付いていて、夏には海水浴客が結構集まると、駅前の観光案内所で話を聞いたオレたちは、とりあえず海に向かって歩いてみた。

「海」

秋の海は寂しいけれど、冬の海ほど冷たくない。

夕暮れに近づいた海は波を白くきらめかせ、波は長く黒ずんだ砂浜に絶え間なく寄せては返っていく。

沖にサーファーが一人。

水平線。

オレと美咲は砂浜に立った。

砂を踏んだ感触がザクツと靴越しに伝わると、美咲は波打ち際まで走っていった。

「わぁぁーっ！」

そして叫んだ。

海は静かだ。

オレも後を追って叫んでみた。

「うおおーっ！」

海は静かだ。

寄せて返ってまた寄って、返って残る波の泡。

美咲は靴を脱ぎ、裸足になってじゃぶじゃぶと海に入った。

「冷たい」

「そりゃそうだ」

「秀雄くんも入ろうよ」

誘われるままに裸足のオレは海の冷たさに入ってみると、足の指に砂が絡んで波に洗われ抜けていく。

「冷てえ」

海の鋭い冷たさに棒のようなオレの足は、やがて海と一緒に becoming てじんわりと鈍くなる。

美咲は波打ち際を歩いていく。

砂浜と足跡。

波。

砂浜と足跡。

波。

砂浜。

オレは消える足跡をもう一度踏みつけて、それでも消える足跡を後ろに振り向き振り向きながら、美咲の後ろを歩いていって、美咲が砂浜のはしっこの防波堤の上に立つと、オレも防波堤の上に立ち、そこで釣りをしているじいさんを見つけて、美咲は後ろから声を掛けた。

「釣れますか？」

「釣れんね」

じいさんは空のバケツを美咲に見せる。

「ここは海が浅いに、あんま魚がいないんね」

帽子に眼鏡の七十ぐらいの白髭のじいさんは、釣竿を揺らしながら海の向こうを見て笑う。

「どうしてここで釣るんです？」

「家が近い」

じいさんは簡単に答えてくれた。

「いい釣場は遠くてなあ。そんなに釣れたら重くなるん、帰るのが面倒」

オレはついつい訊いてみた。

「楽しいですか？」

じいさんは長い息で首を傾げて、最後にはうなずいた。

「暇だからなあ」

じいさんは竿を振り上げ遠くへ飛ばし、じっと座ってだらだら過ごす。

「とこんで、さっき叫んでいたのは、あんたらかい？」

「ええ」

「わしも昔は叫んだなあ」

「そうなんですか？」

「海を見てると叫ばんといかん気がしてなあ。女房は変な顔したなあ」

美咲はじいさんの隣に座り、オレはその隣に座り、静かな竿に静かな波を聴きながら、静かな風に吹かれて、静かに夕陽が沈んでいくのを、赤くなりながら見届けた。

夜。

「帰ろ」

じいさんは今日の成果の空のバケツを持ち上げる。そのときじいさんは思い出したかのように訊いてきた。

「とこんで、あんたら誰なんだい？」

じいさんの帰った夜の海に吹く風の冷たさは、浮かぶ半月の頼りない輝きよりも寒々と、波を揺らして揺らして、砂浜に立つオレの足元からなんともない心許なさを、胸に作って抜けていった。

黒い海。

一日が潰れる。

「どうする？」

海をぼんやり見ている美咲の瞳は、月の明かりにぼんやり濡れて、波のようにゆらゆらしている。

「どうしよう」

顔も向けずに答える美咲の言葉もぼんやりしていて、オレもぼんやりした言葉しか出せなくて、結局ずるずると時間だけが流れて消えて、潮の満ちるのに気付いた頃に、ようやく二人で歩き出した。

「何しに来たんだろうな」

「なんだろうね」

「なんだか一日終わっちゃったよ」

「天気がよかったから」

「ああ、そうだった」

駅に着くと電車はなくて、途方に暮れたオレたちは、とりあえず公衆電話のタウンページで泊まれそうな宿を探して電話をしたが、急な電話に泊まれる宿は見つからず、今日こそ野宿かと思っていると、駅の向こうに輝くお城が建っているのが目に留まった。

「ここなら泊まれそうだよ」

美咲が指差すその洋風のお城は当然のことながらラブホテルで、当然のことながら客も時間も問わないので、今日はここに泊まることにした。それで案内された部屋はショッキングピンクの壁紙の頭の悪くなりそうな部屋で、三面鏡を背負った丸いベッドは回転装置を装備している優れものだったが、そんな機能には用はなく、思った以上に柔らかいベッドに二人並んで倒れこむと、そのまま眠って朝になった。

シャワーの音に目覚めた朝は、鏡に映る自分の顔に始まった。

髭の伸びない朝はない。

美咲はシャワーに入っていて、オレは一人回転ベッドの真ん中に座っていた。

あくび。

回転ベッドのスイッチを入れてみる。

ぐるぐるとオレは回りだした。

オレはゆっくり回る。

男一人で回るベッドは三面鏡に何かの展示品みたいに寝起きのオレを映し出し、シャワーから出た美咲はそんなオレを見て大笑いした。

「何やってるの」

「暇だったから」

そう言ってみると、それ以上の理由はないことがわかり、オレは少し嬉しくなった。

「楽しそうだね」

「乗る？」

シヨッキングピンクの部屋の中、鏡に映るオレと美咲はベッドの上をぐるぐる回り、鏡越しのオレの顔が鏡の前の美咲の顔に、重なり離れてまた重なる。

二人で回転してみると、どちらともなく笑い出し、笑い出してたまらなくなった。

「おかしいね」

「ああ」

ラブホテルで何もしないでただ回る男女が泊まるこの部屋は、もうラブでもホテルでもなくて、なんでもない何かになって回転していることがとてもなんだかおもしろく、オレは笑い続けて、美咲も笑い続けた。

そうして笑っているとは何故だかお腹が空いてきて、それで昨日の昼から何も食べていないことを思い出し、ラブホテルでも注文すれば部屋に食事を届けてくれるぐらいのサービスはあったが、せっかく海に近い観光地にいるのだから、海産物でも食べてやろうということになって、朝ごはんを求めて外に出た。

「何食べたい？」

「三日も同じ下着穿いてると気持ち悪いね」

「さすがにオレも穿き替えたいな」

「コンビニあるかな」

「あるだろ。コンビニだもん」

そう言いながら街を歩いてみるとまだ朝の早いせいか、開いている飲食店が見当たらず、それでもコンビニだけは見つけたので、結局空腹と妥協してどこでも買えるようなコンビニ弁当とお茶を買い、ついでに下着も買って、今度は食べる場所と着替える場所を探して歩き出した。

観光案内の地図を見ると、城跡が公園になっているらしいので、そこで朝食を食べることにした。

石垣の積まれた城跡は高台の上にあり、舗装されない砂利坂の片側からは街の向こうに海が見えた。温めた弁当の冷めるぐらいに歩いて登ると、まったく頂上に生える松の木の数本の向こうに、今は天守閣のない四角い天守台の石垣が、黒い身体に朝日を受けて白く光って建っていた。

朝の公園に人はいない。

「どこで食べる？」

「誰もいないね」

「朝だから」

「芝生がいっぱい」

そう言って美咲は芝生の上に座ってみたが、朝の芝生は昼の芝生のようにフカフカしてはいなかった。朝露に濡れる草を踏む靴の冷たさは、腰を下ろすとお尻にもヒヤリときたが、やがて馴染んでじんわりとした感覚だけがお尻に残る。

冷めた弁当を広げてぬるいお茶を飲む。

冷めた里芋の煮物をホグホグする美咲は、冷めた赤鯉をチマチマするオレに言った。

「ここいいね」

太陽の暖かく、そよぐ風の優しく、見下ろす海の広く、見上げる

空の高く晴れた秋の日の心地よさは、まどろみのように溶けている。

「気持ちいいなあ」

オレはうなずく。

「あつたかいなあ」

オレはうなずく。

「ずっと続けばいいのにね」

美咲は立ち上がって公園をぐるりと回り、それをオレが眺めていると、美咲が何かを持って戻ってきた。

「ボールが落ちてた」

そういうことでオレと美咲はキャッチボールを始めた。

天守台のある頂上はキャッチボールをするには少し手狭だったので、少し降りた「二の丸広場」と看板に書いてある場所でキャッチボールを始めると、これがなかなかおもしろかった。

「行くよー」

「いーぞー」

美咲の投げたゴムのボールは初めうまく飛ばなくて、あらぬ方向へ飛んでいき、それをオレが広場の端まで走って追うと、美咲はそれを見てキャッキヤと笑うので、オレも多少本気になって思い切りブン投げたら、これもあらぬ方向へ飛んでいき、今度は美咲が広場の端までボールを追って走っていった。ボールに追いつく美咲の背中中は拾うと同時にこっちに向いて、振り向きざまにボールを投げたが、ボールはぜんぜん手前に落ちて、結局自分でもう一度ボールを拾い、もう一度こっちへ投げて返すが、やっぱりあらぬ方向へ飛んでいき、オレはひいこら走ってまた追いかけて、掴んで投げたら、ワンバウンドで後逸し、美咲はとっとこ走ってまた追いかける。

振れる黒髪の広く舞う。

「えーい」

「おりゃー」

「飛びすぎー」

「走れー」

オレも美咲も犬みたいに走るの、なんだかとても楽しくなって、二人で笑って投げ合うボールは、徐々に失投暴投が減っていき、少しはキャッチボールらしくなってきたなと思う頃には、公園を歩く人の数もだいぶ増え、陽射しも随分高いところから降るようになっていた。

運動をしたらお腹が空いて、公園内の売店をのぞくとホットドックが売っていたので二人で買って、ベンチに座って並んで食べた。マスタード。

口の刺激に過ぎる昼。

「汗びっしょり」

陽射しの暖かさは身体の熱で暑さに変わり、服も下着も汗に湿ってぐっしょりしていて、そこで何かを思い出した。

「そういえば、下着替えたっけ？」

「あれ？」

天守台の広場に戻ってみると、昼の陽射しにフカフカになった芝生の上にビニール袋が転がっていて、その中に入ったかくなったオレのトランクと美咲のパンツとブラジャーが入っていた。

城と芝生と男女の下着。

なんかおもしろかったの、二人で笑った。

「楽しいね」

美咲の表情は明るくて、そこにはなんの不平も不満も感じられず、心から楽しくて、だから笑う美咲の顔は、とてもきれいに輝いていた。

「ずっと続けばいいのになあ」

それは陳腐なセリフであって、陳腐だからこそ本心で、本心だからこそオレもそう思って、うなずきながらオレは美咲の横顔を眺めていた。

午後。

公衆トイレで下着を替えて、少し爽やかになったオレと美咲は、芝生に転がって久しぶりの運動に疲れた身体を休めていると、オレ

の携帯電話が鳴り出した。

バイト先からだった。

気付けば二泊三日の小旅行になっていて、いつの間にかにバイトを無断欠勤してしまい、店長から怒りの電話が飛んできた。オレは平身低頭で謝り倒し、今日の深夜シフトに一人空きが出たので、それを深夜割増なしで埋めてくれれば許してやると言いくるめられ、今すぐ帰らなければならなくなった。

そのことを美咲に言つと、美咲はちよつと寂しい顔をしたけれど、すぐに「こんなになく付き合わせちゃってごめんね」と謝った。それがなんだかとても痛く、オレは「そんなことないよ」と笑つてみたが痛さは消えず、美咲の長い黒髪が風にも揺れずに落ち着くさまは、なんだか折れてしまったように心に残った。

「このボールどうしよう」

黄ばんだゴムボール。

「落ちてたんだから、戻しとけばいいんじゃないか」

「そうだね。それが一番だね」

そう言つて美咲は大きく振り被ると、ゴムボールを空に向かって大きく投げた。

空。

美咲の髪が大きく翻った。

第五話「深夜のコンビ二」

そんなこんなで駅に戻って電車に乗って、ガタゴト揺られて家まで帰って、風呂に入って、着替えて、夕飯食べて、歯を磨いて、髭を剃って、爽やかな好青年に変身したオレは、昼間の時給で深夜のコンビ二の棚の整理をやっていた。

一人。

ポテトチップスの袋を掴みながら聞き流すラジオの曲は歌詞もわからない洋楽で、静かだったと思つたら、急に激しくギターが唸り、ドラムのビートの刻みは鋭く、高く速く跳ね上がる音の弾丸は、鈍いベースの低音が余韻を残すと、そのまま静かに終わっていった。ポテトチップスがきれいに棚に並んでいる。

わざと一袋裏返しにしてみる。

客に背を向けるポテトチップス。

ちよつといい。

レジに立って客を待つ。

「いらつしゃいませー」

二十歳前後の若い男の二人組。

「なに食う？」

「弁当」

「がつちりいくね」

「おまえ野菜ジュースなんか飲むの？」

「いらつしゃいませー」

仕事帰りらしき背広姿の三十男。

「やっぱさ、ケンコーには気を付けねえと。飲むか？」

「よく飲めんな。野菜はダメだ、受けつけねえ。やっぱさ、食えないもんは、食っちゃいけないんだよ。せつかくそれはマズイって身体が教えてくれてんだからさ」

レジに塩トンカツ弁当。

「お弁当は温めますか？」

「はい」

「お会計五百二十円になります」

「やっぱ若者は肉だべ」

「オレは好きなんだよ」

ピー。

「ありがとうございましたー」

出て行く二人組みに雑誌を立ち読み始める三十男。

プレイボーイ。

ラジオはフォークでかまやつひろしの『我が良き友よ』。

「いらつしゃいませー」

若いカップル。

「うそー」

「なんだよ」

「ありえない。ここ化粧品ない」

「あるじゃん」

「これじゃないの、もっとちがうやつ」

「なんだよ、つかえねーな」

「べつ行こ」

「あ、ちよつとまって。タバコ買うわ。兄ちゃん、タバコ」

「どちらですか？」

「そのの。そののそれ」

「えーと」

「トロいなあ、それだつて」

「あの、番号で言っていただけとありがたいのですが……」

「ああん？」

「まーだー？」

「もうちよつとまって。なんだ番号がついてるんなら先に言えよ。十八番の奴」

「二百八十円になります」

「今度からはすぐ見つけるよ」

「ありがとうございます」

「ダメなコンビニだわ。もう来ないね」

「あたしもー」

カッブルが出て行くと、三十男がプレイボーイとビールとポテトチップスをレジに置く。

「お会計八百三十円になります」

袋に詰めるポテトチップスとビール。

「雑誌は別の袋にお入れしますか？」

首を横振る三十男。

「ありがとうございます」

週刊誌を小脇に抱え、三十男は店を出る。
一人。

ラジオはまだフォークで吉田拓郎の『落陽』。

「いらつしゃいませー」

酔っ払い。

「こんにちはー！」

「……」

「どーした、元気がないぞー！ 若い者は元気があー一番！ 元気で
すかあー！」

「あー、と、それなりに……」

「ごめんなあ、酔っ払ってて。お酒がなあ、おいしくて」

「いえ、そんな」

「キミ、大学生？」

「はい、一応……」

「いいなあ、いいなあ、大学生はいいなあ、若いっていいなあ、お
じさんも昔は大学生だったんだよ」

「そうですか」

「ごめんなあ、酔っ払ってて。剣道はやってるか？」

「え、いえ、剣道はちよつと」

「剣道はなあ、こう構えるとな、相手が見えてくるんだよ。隙がな、どうかとかな、肌でな、わかるんだよ」

「剣道をやってるんですか？」

「三段」

「すごいですね」

「目を瞑つてもな、見えるんだよ。心眼でな、それが達人」

「はあ、すごいですね」

「ごめんなあ、酔っ払つてて。キミ東大生？」

「え、いえ、違いますけど……」

「ごめんなあ、酔っ払っちゃてるもんだから、ごめんなあ。お酒どこ？」

「あちらです」

缶ビール一ダース。

「ビール十二本、千八百二十四円になります」

「飲むか？」

「いえ」

「ごめんなあ、ほんとうに酔っ払ってるもんだからなあ、ダメだわ。はあ」

買ったビールをその場で飲む。

「あの、すいません。店内で飲むのは勘弁してもらえませんか？うか」

「あ、ああー、ごめんなあ、酔っ払つてて。はあー、どうして飲んでしまっただかなあ、どうにかならんかなあ、やっぱり東大生がいかんのかなあ、東大生はダメだからなあ。キミ、酒は飲めるの？」

「飲めますけど、ここではやめてください」

「お酒はね、若いうちが一番楽しいよ。稽古の帰りによく飲んだなあ。おいしいんだあ。みんなでね、飲み比べてね、楽しかったなあ

「」

「はあ」

「剣道はいいぞあー」

「はあ」

「でも東大生はダメだぞぉー」

「……」

「ごめんなあ、酔っ払ってて」

二時間居座ったこの四十絡みの酔っ払いは結局店内で寝てしまい、仕方ないので警察を呼んで連れて行ってもらった頃には、朝だか夜だかわからない四時という一番暇な時間帯になっていた。

一人。

ラジオは軽快な J P O P。

ポテトチップスはいつの間にかもとに戻っていた。

きつとあの三十男だ。

直されたのかもしれないし、もしかしたら売れたのかもしれない。どっちでもいいようで、どっちでもよくないかもしれないけれど、それを考えることがどうでもいいように思えてきて、やめた。

集配がやってきた。

商品の陳列。

あくび。

日が昇る。

これで六千四百円。

眠い。

眠りの中でぼんやりとした夢を見る。

夢の中に美咲の黒髪が見えた気がした。

ぼんやりとした夢から覚めると、ぼんやりとした頭が残った。

第六話「部屋と猫とオレとお隣」

部屋で起きた朝は昼の二時を過ぎていた。

窓差す光の薄暗さに、オレはのっそりとカーテンを開けた。

庭に猫。

オレの借りている部屋は、大学よりもよほど都市部に近い住宅街の一角にある、二階建てのアパートの一階の隅にある部屋で、これには一坪ぐらいのちよつとした庭が付いていて、隣の部屋は女の子が住んでいるので花なんか植えてあったが、オレの部屋の庭には伸び放題の雑草がボウボウとやってくれていた。

こんな庭にも客が来るもので、猫が一匹勝手に縄張りにしてしまい、毎日律儀に巡回にやってくる。

今、庭に座っている。

目の据わった感じのおよそ愛嬌とは無縁に思われるガラの悪いブチ猫で、身体もデカイものだからその印象はますます強いが、やっぱりその通りの性格で、人懐こくもないが人を恐れるフリもなく、オレの姿を部屋の中に認めると、ずうずうしく部屋の窓をカシカシやって餌をよこせと要求してきた。

あくびのオレは冷蔵庫からチクワを出してくれてやる。
はぐぼぐ。

二時の天気心地よさの下、チクワをほお張る猫の口はむしゃむしゃ動いて、Ｔシャツにトランクスの寝姿のままでそれをぼんやり眺めるオレに、隣から声が降ってきた。

「猫だ」

垣根の向こうに人がいて、それは隣の部屋の女の子で、顔は何度か見たことがあるが、声を聴くのは初めてだった。

目が合うと彼女は少し固まって、自分でも思いがけずに声が出たのか、思わぬ隣人との遭遇に彼女は戸惑いの顔を見せた。それは路地裏で初めて遇った野良猫の、警戒感と好奇心に入り混じった態度

のようで、見ていておもしろかったオレは、猫にでも話し掛けるように彼女に向かって声を掛けた。

「猫好き？」

彼女は目の前に投げられた餌を食べようか食べまいか躊躇する猫のように、どう答えようかしばらく思案した後に、ためらいがちに首を縦に振ってきた。

「餌を持ってくれば何でも食べるよ」

オレがそう言っている間に猫はチクワを食べ終えると、これで終わりかとオレの足元にまとわりついた。

「できれば早くね」

うなずいた彼女は平皿に盛ったごはんと一緒にミルクまで盛ってきた。ごはんの上にはさらにカツオ節までまぶしてある豪華さだ。

彼女は垣根を乗り越えてこの豪勢なランチを猫の前に披露した。舌なめずりした猫は、まずミルクに舌をつけると、旺盛な食欲で皿に顔を埋め続ける。

はぐほぐはぐ。

「かわいい猫ですね」

彼女はしゃがんで猫の食事を見ながらそう言ったが、オレはこのふてぶてしい猫をおもしろいとは思っていたが、かわいいとは一度も思ったことがなかったので、彼女は本物の猫好きなんだろうなと思った。

「名前はなんていうんですか？」

「知らない」

「野良猫なんですか？」

「たぶん」

その割にはいい図体なので、きっとよそでも餌をたかって回る半野良の猫だろうなとオレは推測していた。

「だから誰か名前は付けているかもしれないけど、あっても一つや二つじゃないだろうね」

「名前は付けないんですか？」

「別に飼ってるわけじゃないし」

「でも、名前があつたほうがいいじゃないですか」

彼女の言うことはもつともだったが、今までそういう気持ちになつたことがなかったし、それはこの猫がこの猫でなくなるような気がして、何かためらわれるものがあつた。

「ネコでいいよ。夏目漱石にならつて」

「吾輩ですか？」

彼女が言つた「ワガハイ」という言葉は、妙にこのデカデカした猫にしっくりくる名前で、なるほどこいつはワガハイか、と思うとこれ以上の名前はなく、「ワガハイ、ワガハイ」とオレはしきりにうなずいて、

「いいね、ワガハイ。そうだワガハイにしよう。おい、ワガハイ」と呼んだが、ワガハイは見事なまでのワガハイぶりで、それがだからどうしたと、興味も示さず餌をはぐほく食べ続けた。

そうこう話している内に、ランチを食べ終えたワガハイはお腹がいっぱいになつたなあと言わんばかりにごろりと横になり、土まみれの小汚い腹をでかんと見せて、手足を伸ばしてあくびをした。

そのさまに彼女は嬉々とした。

「かわいい。懐いているんですね。ぜんぜん警戒心がないですよ」

いくぶんか尊敬の含まれた眼差しを受けたオレは少し面映い気持ちになつたが、このワガハイの態度に関して言えば単に人間なんて警戒するに値しない、遊んでやるから早くしろと言っているように見えた。それというのも初めて餌をあげたときからワガハイの態度に変化がないからである。それがワガハイだった。

オレは庭の雑草からねこじやしを引っこ抜くと、それを寝ているワガハイの上でフリフリした。するとワガハイの眼つきが豹変しにやろつきやがつたなやつてやるぜおい、とばかりに前足をフリフリしてねこじやしにじやらされ始めた。

「かわいい」

やっぱり彼女は感激する。

「やる？」

二人掛かりでねこじやらしを振ると、ワガハイは右に左にじゃれ跳び回る。

さすがに飽きたか疲れたか、それとも他に用事があるのか、ワガハイは不意に横を向くと、そのまま背中を向けて、お礼も言わずに去っていった。

「あーあ、行っちゃった」

残念そうな彼女の声は、ワガハイと遊んで気分が高揚しているのか、猫に懐かれる人には悪い人がいないと思っているのか、最初の警戒する猫のような態度に比べると、随分親しげなものになった。

「いいなあ、こっちの庭には猫が来て」

「庭が汚いから、敷居が低いんじゃない？」

「いいなあ」

名残惜しげにワガハイの去った後を見つめる彼女に名前を訊くと、「えっ」と振り向く彼女はやっと猫の背中の中の消えた目で、少し顔を赤くしながら俯きがちに「笹倉頼子です」と答えたので、こっちも「梶井秀雄です。お隣さんです。よろしく」と挨拶した。

笹倉さんはオレとは違う大学に通う猫好きの一年生だった。

「猫飼ってたの？」

「実家で三匹。だから寂しくて、でもこっちだと飼えなくて」

猫は家に棲むので、下手にこっちで飼うと引越などしたときに可哀想なことになるらしく、猫なしの生活をしていたところで猫に会ったので、何か非常に恥ずかしいところをお見せしましたと、笹倉さんはとても恐縮してくれた。

「禁断症状だ」

オレが言うと笹倉さんは苦笑して、「だから庭付きのアパートにしたんです」と言い、「猫が通るかもしれないと思って。でも、猫が通るのは隣の部屋でしたね」と笑った。

「けど、女の子の一人暮らしでアパートの一階は危ないよ」

「でも、お隣さんが猫好きのいい人でよかったです」

笹倉さんはやっぱり猫好きに悪い人はいないと思っっているようで、猫は好きだが特別な猫好きではないオレなんかをそんな簡単に「いい人」と判断して大丈夫なのかと、少し笹倉さんを心配してしまっただが、笹倉さんは欲求不満が解消された笑顔で皿を片付けると、「またワガハイと遊んでもいいですか？」と訊いてきたので、「オレの猫じゃないし、ワガハイに訊いてみて」と答えると、笹倉さんは元気に「はい」とうなずいて、猫みたいに身軽な動きで垣根を越えると、こつちを一度振り向いて、

「こんな時間までそんな格好をしているのは不健康ですよ。猫はいけど女の子の前ではきれいにしていた方がいいですよ」とありがたい忠告を残して部屋へ帰っていった。

四時。

部屋とＴシャツと私。

なんかもうダメだなこれとは思っていると、ワガハイが庭に戻ってきた。

「ワガハイ」

無視してどっか行っただ。

さすがワガハイ。

羨ましく思っただ。

第七話「シューカツ」

久しぶりに大学に行くと木島のスーツ姿に出会って驚いた。

「就活だよ、シューカツ」

大学三年の秋となると、そろそろ就職活動の始まるシーズンであり、大手企業や人気の職種などは十月ぐらいには説明会を始めるところもある。こうした企業のエントリーは年内に締め切られたりするそうで、いい就職口を狙う学生は早くもリクルートスーツに身を包み、東へ西へと就職セミナーや企業説明会に顔をバンバン出していた。

「似合わねえ」

「そのうちスーツの方が俺に馴染む」

うそぶく木島のスーツはパツツンパツツンに詰まっていて、もう少しサイズの合うスーツは用意できなかったのかと思ってしまう。

「どっか行ってきたのか？」

「これから。セミナーに顔出してくる。午前中は授業だよ」

卒業論文提出資格単位にギリギリ足りていない木島は、普通は一年生で修得するはずの必修単位を取るために朝の九時から大学にやってくる。授業を受けた後に午後の二時から始まるセミナーに向かうらしい。

「早く取つときゃいいもんを」

「だって出席取るんだぜ。ありえねえよ」

必修単位である経済学概論は基礎の基礎の授業であり、それ故に出席を重視する、というか出席さえしていれば大抵受かる程度の試験しかないので、この授業の単位を取っているかいなかで、その人物の性格というものがおおよそ察せられるというものだった。ちなみにオレは去年取得していて、木島よりは余裕ある大学生活を送っている。

「お前は就活せんのか？」

「いまいち、まだピンとこないなあ」

「俺は早くせんとマズイ」

単位ギリギリの木島は来年の四、五月までに就職を決めて、残りの時間をすべて卒業単位取得に投入するという計画を立てていた。単純に言えばこの二年半の墮落した大学生活の清算をこの秋から一年半かけてやるということだった。普通は就活を始める前に単位を集めておいて、最後の一年を就職活動と卒業論文や卒業試験対策に費やすものであるが、そこはやはり木島であった。

「オレはそこまで焦つたらん」

「いいなあ。単位くれよ」

「オレが欲しいよ」

「ギブ・ミー・タンイツ！」

そうこう話しているうちに木島の時間がやばくなってきた。

「げっ、もうこんな時間か。社会人は時間厳守だ。そんじゃな！」

走り去る木島の背中を見送るオレは、「社会人」などという言葉の口にする木島に違和感を覚えた。

「あいつが社会人になれるなら、社会人も適当なもんだな」

「ふーん」

授業で顔を合わせた美咲に、構内のカフェテリアでお茶をしながら今日の木島の話をしてみると、美咲の反応は「ふーん」で終わった。

「美咲はどうすんの？」

「知らない」

美咲は左手で黒髪を弄りながら、他人事のように返事した。

秋が深まり庭の雑草も枯れる中、今日もワガハイは庭に来て、今日も笹倉さんが部屋に来る。

「うりうり」

笹倉さんはネコ専用ブラシを買ってきて、ワガハイの身体をブラッシングし、ついでにマツサージまでうりうりとしてあげたので、ワガハイはなんとも言えない快樂に溺れた顔でゴロゴロしている。

「ここが いいみたい」

ワガハイのでっぷりお腹の左右の脇を笹倉さんが優しく撫でると、ワガハイの細めた目がますます細まり、たまらずに口を開けて今にも「ふにゃ〜」と鳴き出しそうな顔をする。

「かわいい」

笹倉さんは拾った猫が家に馴染む自然さで、オレの部屋に馴染んでしまい、ワガハイに餌をあげるついでに、オレにも餌をくれるようになっていた。

「こんな食事じゃ身体に悪いですよ」

オレの部屋の台所に積まれたカップめんを見るなりそう言った笹倉さんは、自分の部屋から卵と野菜を持ってくると、フライパンでちやつちやと炒めてオムレツを作ってくれた。

「おいしい」

あったかいオムレツはあったかい味がして、気持ちもあったかくなったオレは素直な言葉を口にする、笹倉さんは笑顔になる。

「また、作ってあげますよ。そうだ、今度は一緒に食べましょう。一人分だけ作るのって面倒だし、それに一人の食事って寂しくて」
断わる理由も特になく、次の日にオレの部屋には二人と一匹の皿が並んだ。

白いご飯に味噌汁に、キャベツたっぷりの野菜炒め。ワガハイには皿にあけたキャットフード。

「笹倉さんって料理上手だね」

「そんなことないですよ。これぐらい梶井さんでも作れますって」
しんなりキャベツのあったかい味にご飯を加えてあごをモシヤモシヤ動かすオレを、笹倉さんはニコニコした顔で眺めている。

「梶井さんって、なんかかわいいですね」

オレはちよつとびっくりして、水を飲んだ。

「私、兄がいるんですけど、似た感じなんですよね、梶井さんに」
「そうなんだ」

「だから安心できるのかな？ 私、お兄ちゃん子だったんです」
「どこが似てるの？」

「うーん、なんかちよつと抜けてるっていうか、気にしないっていうか、ぼんやりしているみたいな、そんな感じの……あ、悪い意味じゃないですからね」

笹倉さんはオレにかわいいお兄さんを見ているらしい。

ワガハイが鳴いている。

「あつ、もう食べちゃった？ 待っててね、すぐおかわりあげるから」

おかわりをもらって満足したワガハイは、やっぱり用は済んだと言わんばかりに背中を見せて、礼も見せずに垣根の向こうに去っていった。

「あーあ、行っちゃった」

笹倉さんは名残惜しげにしばらく見送っていたが、やがて食卓に戻ってご飯を食べた。

「ごちそうさま。おいしいご飯ありがとう」

ワガハイよりも礼儀正しいオレは笹倉さんに素直な気持ちでお礼を言つと、笹倉さんはやっぱり笑顔でこう言った。

「夕飯も一緒に食べませんか？」

妹のように安心してゐる笹倉さんは、それからワガハイがいなくてもちよくちよくオレの部屋で食事をするようになり、猫のこととか、大学のこととか、猫のこととか、友達のこととか、猫のこととか、お兄さんのこととか、猫のこととかいろいろ話す。

「実は私、最近彼氏ができたんですけど、それで相談したいことが……」

隣人に彼氏ができたらしい。

壁越しに聞こえる音に隣人の顔を見る。

夜の音。

オレは布団をかぶって長い夜を眠る。

十一月になったので文化祭が始まって、それにちよつと顔を出すと、美咲が彼氏を連れてデートしていた。

「田中くん」

一週間前に告白されたらと美咲が紹介した男は、痩せ眼鏡の削られた鉛筆のような印象の男だった。

「一年生なの。これが秀雄くん」

田中くんは軽く頭を下げて「どうも」と言ったが、声が小さいのであまりよく聞こえなかったたので、たぶん「どうも」と言ったのだろつと、オレも「どうも」と頭を下げて挨拶する。

三人で文化祭を回ることになった。

メインステージで学生のコピーバンドが演奏するブルーハーツの流れる文化祭の会場の人の入りはまあまあで、盛り上がりもそんな感じにまあまあだった。

五十円の綿菓子舐めながら、美咲は先頭に立ってオレと田中くんを連れ歩く。けれど特に行く場所も決めてなかったようので、呼び子に誘われるままに陶芸部で展示会を見たり、アーチェリー部で風船割りゲームをしたり、お好み焼き屋でジャンボお好み焼きを三人で食べたり、貸衣装屋で巫女さん衣装にコスプレしたり、民族楽器研究会でアフリカ音楽の演奏を聴いたり、喫茶店で手作りケーキを食べたりした。

広場に設けられた喫茶コーナーで手作りケーキを食べるオレと田中くんは、ちよつと離れたところでカメラ小僧に囲まれてバシバシと撮影される赤と白の巫女さん姿の美咲を見ながら、美咲についての話をしていた。

「美咲のどこがよかったの？」

田中くんは撮影される美咲の後ろ姿を指差す。

「ここで、美咲さんが空き缶の山を壊すのを見たんです」

美咲を話す、田中くんの声はしっかりとしていた。

「見てたんだ」

「梶井さんもいましたよね」

「結構大変だったんだ。あれ」

「震えました」

田中くんは美咲の黒髪を強く見る。

「美しかった」

田中くんは美咲の黒髪を強く見る。

「訊いたんです。美咲さんに、あれはなんだったのかと。そうしたらこう答えてくれました」

「『わかんない』」

美咲の声マネをしたオレに田中くんの顔が振り向く。

「そうです。よくわかつているんですね。美咲さんのこと」

「付き合いたい長いもの。よくやるんだよ、ああいう無意味なこと」

「そこが素敵なんです」

田中くんはニヤリと笑う。

「美咲さんは無意味の意味を知っているんですよ。だから意味の向こうに行ける。美咲さんは自由なんです」

そう言って田中くんはもう一度美咲を見る。

「だから美咲さんは素敵なんです。あんなカメラでは捉えられないフラッシュに光る美咲の横顔に、影が浮かんで消えていく。」

寒気の到来した十二月の空は灰色で、三年前に購入したコートもいい加減にぼろくなって、寒さを凌ぐのが大変になったので、新しいコートを買い換えるついでに新品のスーツも買ってみた。
「似合ってますよ」

部屋に戻って着替えてみると、笹倉さんが誉めてくれた。

「就職活動しなきゃならないからね」

「スーツを着ると、男の人ってやっぱり変わりますね。キリッとして」

スーツの縦のストライプがオレの身体を引き締める。

「格好いい？」

「梶井さんじゃないみたい」

鏡に映るスーツのオレが、鏡に立つオレを見ている。

オレを見るオレがオレを笑う。

オレは少しネクタイを緩めた。

第八話「明日はどっちだ」

大学が終わるとクリスマスがやってきて、クリスマスが終わると大晦日がやってきて、大晦日が終わると新年がやってくる、師走の目まぐるしい年中行事が始まる前に、オレは美咲と一緒に帰省していた。

「クリスマスは田中くんと過ごさんの？」

「世間に踊らされるのが嫌なんだって」

田中くんの痩せ眼鏡はそんなことをのたまいそうだと得心しながら、鈍行列車のボックス席に向かい合って座るオレと美咲は、窓の外に降る雪を見ていた。

寒波が吹いた今年の師走は、長いトンネルを抜ける前から車窓に雪国を映していて、例年より倍に頑張るヒーターに火照る空気の漂う車内は、少しオレと美咲の頭をぼんやりとさせていた。

白い窓を擦った景色は、白と白とに木々の黒が垣間に見える。

「美咲もそうなの？」

「踊りたいときは踊るよ」

「どんなとき？」

「ケーキ食いたい」

けれどここにはケーキはなくて、電車に乗る前に購入した駅弁が二つきりだけだった。

田舎の同じオレと美咲は、毎年一緒に帰省する。

おしんこをポリポリかじる美咲は、ボーっとした顔でモグモグとご飯を食べる。

長いトンネル。

窓は黒く鏡となつて、弁当を食べるオレと美咲のぼんやりとした横顔を映す。

耳鳴り。

唾を飲む。

「暇だね」

「暇だな」

弁当を食べ終えた美咲のあくびの倦怠は、眠気となって美咲のまぶたを重くする。

美咲の寝顔。

耳鳴り。

唾を飲む。

県境の長いトンネルを抜けてもそこは雪国だった。

「もうすぐ着くぞ」

冬至の近いこの季節に、鈍行列車は日が暮れて、駅に着いた雪降る空は、真つ暗闇に寒かった。

「今年は雪が多いなあ。さすが寒波」

「歩けない」

道路の脇には除雪された二メートルを超える雪の壁が並んでいて、美咲の家は駅からそんなに離れてはいなかったが、歩くのはかなりの難儀に見えたので、オレと美咲は家に迎えを電話して、車が来るのを駅舎のストーブにあたりながら待つてみた。

雪を眺める。

しんしん。

ストーブの赤色が顔を熱に照らし、駅舎の外の暗闇が背中に冷気を凍てつける。

「焚き火のときみたいだな」

「焚き火の方がきれいだよ」

「危ないけどな」

美咲はストーブをこづいたが、硬かったのか熱かったのかヒラヒラと手を振った。

「危ないって」

「火だから危ないのかな？ 危ないから火なのかな？」

美咲の問いに、ストーブの炎の音は低く小さく燃えている。

「どっちにしたって危ねえよ」

「そうだね」

美咲はオレの顔を見る。

「あれ？」

「何？」

「そのコートって新品？」

「今頃気付くなよ」

美咲は上から下にオレを見て、「ふーん」と言っただけを見ると、暗闇にライトが二つ浮かんでいた。

車が来た。

「それじゃね」

母親の車に乗って帰る美咲を見送って、オレはオレの迎えを待つ。雪に凍る道と空とは、新品のコートでも寒かった。

年が明けておめでたい一週間が過ぎ、特にめでたくもない一週間が始まると、大学には試験の嵐が吹いてやんだ。

「単位出るかなあ」

「俺は信じている」

「何を？」

「俺と先生とレポートと何かの間違いと、その他世界のすべての俺の単位に関する諸々の何かを信じる。というか信仰する。というか神さま助けて」

木島の単位はギリギリで、単位が出ないと留年なのだが、木島のレポートはそれだけでは信頼するに値しないものらしい。

「どうか私の未来を閉ざさないで下さい」

「神社でも行っただけだよ」

「行ったよ、初詣」

「賽銭いくら？」

「五円」

五円でつなぐ御縁で未来をつなぐとする木島の面はなかなか厚かった。

「そりや留年だな」

「お前はいくらだよ」

「一円」

「俺は五倍だぞ、五倍。鼻くそが目くそを笑うな」

「一円でも一万円でも円は縁だよ。それに鼻くそも目くそも変わらないだろ」

「いいや、目くその方がきれいだ」

「変わんねえよ」

目くその木島と鼻くそのオレとの、目くそ鼻くそ論争はしばらく不毛に続いたが、不毛の議論から毛が生えることはなく、やがてぽっかり沈黙が浮いた。

冬の空に雲はない。

試験明けの月曜日に、合同企業説明会に参加した帰りの、ビルの隙間の公園だった。

ベンチに座るオレと木島は冷めたお茶を飲んでいる。

「いいところあったか？」

「さっぱりわからん」

雲のない空の茫漠は遠かった。

「業界絞れた？」

オレが訊くと木島は軽くうなずいた。

「だいたい見当はつけた」

「どこ？」

「医療介護用品メーカー」

木島の読みだと少子高齢化の日本の将来で一番確実に業績を伸ばす業界は医療福祉であった。しかし、医療福祉も現場で働くとなると資格やらが面倒だし、何しろ制度が整っていないので個人の負担の割りに報酬も少なく保障も不透明で、しかもその状態が改善される見込みは、小さな政府を目標に社会の問題を個人の負担で解決し

ようとする今の国の態度だと、十年以内にはありえない。そこで狙うは需要だけは高くなる医療福祉の現場に医療介護用品を供給するメーカーである。ここなら制度不良の現場の苦しみを受けることなく業界のうまみだけ吸い取れると木島は判断したらしい。実際ここ数年での医療介護用品メーカーの成長は著しい。

「成長は安定した人生設計の基本だ」

木島のようないい加減な男が、そんなセリフを吐くとは思ってもしなかったので、バイト中にも「人生設計」という言葉が真っ白な頭の中に浮いていた。

深夜のコンビニ。

暖房に生温かい客のいないコンビニの、天井に並ぶ蛍光灯をレジに座って眺めていると、「就職活動やってるの？」というおふくろの言葉が、「人生設計」の隣辺りに浮かんできた。

正月にコタツでみかんを食べながら箱根駅伝を見ていたオレに、おふくろが隣から訊いてきた。

「最近は秋ぐらいから就職活動をするんだろ？ あんたはいつも腰が重いから心配なんだよ」

「大丈夫だって、これからやっても遅くはないよ。いいとこ狙ってないしさ、本番は二月ぐらいからだって」

オレは軽く言ってやったが、おふくろは半信半疑の眼差しをオレに向けると、「これだけは」といった感じで最後に一言呟いた。

「ニートやフリーターは勘弁だよ」

オレは「レッテルで人を判断しちゃダメだよ」とおふくろに言ってみたかったが、それでもレッテルというのは重要で、今のオレに付いて回る大学生というレッテルは、若気という無茶が効いたり、学割という割り引きが効いたり、何かと便利なものではあった。

けれど、それだけに何かと義務も付いているようで、どうにか新卒で就職しないとダメ学生の末路のごとく言われてしまう怖さのようなものが付いて回るが、逆に言えば就職さえちゃんとやればどれだけダメな大学生活も全部肯定されてしまう安易さを含んでいた

りもした。

少なくともおふくろは納得するということはわかった。そういうわけでグダグダな生活を送るオレも、まっとうな正社員として社会に出て、その身分を過去の免罪符にしてやるうかと、就職活動を始めたはいが、これにどうも馴染めなかった。

合同企業説明会会場。

リクルートスーツの群れ。

清潔感溢れる企業ブース。

にこやかな笑顔で説明をする各企業の人事担当者。

説明会の会場は終始なごやかな空気に張り詰めていて、オレは息苦しくて二、三社の説明を受けたただけですぐに会場から出てしまった。

公園のベンチでお茶を飲みながら木島を待つ、ビルの隙間の冬の空。

雲は一つも見当たらなかった。

二月。

「大学が終わると暇ですね」

笹倉さんは膝に丸まるワガハイを撫でながら呟いた。

「彼はどうしたの？」

窓際の日当たりは良好で、閉じた窓は晴れ渡る空から吹き降ろす冷風を遮って、柔らかな陽射しだけを部屋の中に入れている。

「バイトです」

笹倉さんのワガハイを撫でる手は陽射しよりも柔らかだったが、答える声は二月の庭よりも寂しげだった。

「短期集中のバイトで泊り込みらしいですけど、払いがいいって」
「ご飯を食べてお腹いっぱいなのワガハイは、丸い身体をよりより丸く、日だまりに至福の顔で笹倉さんに撫でられながら、誰にも掛け

る気を持たず、眠りたただけ眠っていた。

「家賃が足りないんですって」

冬に枯れた二月の庭は、片付けられない枯れ草に、茶色になって寂れている。

「暇です」

笹倉さんの背中でお昼ご飯の食器を片付けるオレは、ワガハイの肉球をプニプニする笹倉さんに訊いてみた。

「笹倉さんのバイトは？」

「明日です」

「そう」

「梶井さんの就職活動は？」

「今日は自主休業」

ワガハイも眠ってしまつて持て余す暇に、オレと笹倉さんは食器を洗つて歯を磨き、身支度を整えて散歩に出かけた。

「息抜きも必要ですよ」

笹倉さんは手作りのマフラーを首に巻き、オレはコートのボタンを上まで締める。

「寒いですか？」

「そのマフラーあつたかそうだね」

赤い毛糸のマフラー。

「よかつたら作りましょうか？」

「いいの？」

「おととい一本完成したんですけど、毛糸がまだ余ってるからまだ作れますよ」

笹倉さんが嬉しそうに話すので、オレはなるほどとうなずいた。

「そうか、バレンタインか」

笹倉さんは小さくうなずく。

「そういえばもうすぐだったなあ」

「張り切つてたらずくにできちゃって。これでやる事ができました」

笹倉さんがニコニコなので、オレもニコニコになつてみた。

住宅街をフラフラ歩くオレと笹倉さんは、とりあえず駅に向かつて歩いてみた。

並んで歩く二人の道は、風がやんで暖かく、午後の街に静かな音は、二人の足音を耳に届ける。

「二人で外を歩くのって初めてですね」

「そういえばそうだね」

駅に着くとCDショップの店先に、リバイバル映画のポスターを見つけて、おもしろそうだったので電車に乗って映画館に行き、途中入場で往年のハリウッド製アクション超大作を見て、「アメリカ人は真つ直ぐだから不死身なのかなあ」とかい合つて部屋に帰った。

ダイハード。

「就職活動、頑張ってくださいね」

笹倉さんの声援を背中に受けて、オレは就職戦線に立ち向かう。

翌日オレは意気揚々とインターネットカフェに行き、求人情報を見て閉じた。

「やる気」

「意欲」

「目標」

「人生のステップアップ」

「論理的な自己表現」

「人間性」

「自己実現」

「能力給」

「成果主義」

オレはだいぶ死にやすい。

ワガハイに餌をあげていると、おふくろから電話があつた。

「ちゃんと就職活動やってるの？ 正社員になって何年勤めるかは別だけど、まっとうな仕事に就かないと、部屋も借りられない世の

中だし、新卒採用逃すと人生の信用を失うんだからね。フリーターなんかになるんじゃないよ」

正社員という言葉の安易さ。フリーターという言葉の安易さ。安易だから強靱なのだ。強靱だから怖いのだ。

どうしたらいいのだろうか？

ああ。

餌を食べたワガハイは、軽やかに垣根を跳び越え去っていく。

第九話「美咲と爆弾」

美咲が爆弾を持って大学にやってきた。

「何それ？」

「爆弾」

見るからに爆弾なそれは時限爆弾らしく数本のダイナマイトに時計がくっ付いていて、テレビや漫画でお馴染みの、愛嬌ある親しみやすい姿で美咲の右手に納まっていた。

「どうすんのそれ？」

「さあ」

「さあ、って」

「爆弾って何に使えるの？」

「そりゃ爆弾だから、爆発させるとか」

「じゃあ、やってみよう」

平然と言ったのけた美咲は、爆弾を持って歩き出した。

「おい、どこ行くんだよ」

「どこで爆発させたらいいかな？」

そう美咲が訊いてくるので、オレは親切に答えてやった。

「何か目標があった方がいいんじゃないか？」

「やるなら派手なのがいいな」

「じゃあ、人の多いところ」

「駅？」

それで渋谷駅やら新宿駅やらに行ってみたが、美咲はどうもしくりこないらしい。

「人は多いけど、壊しておもしろいものはないよ」

「ハチ公とかモヤイ像とか」

「ちっちゃい」

「都庁」

「でかいだけ」

美咲はいろいろ難癖をつける。東京タワーに雷門、通天閣に成田空港、シンデレラ城に姫路城、奈良の大仏に瀬戸大橋と、いろいろ巡ってみるけれど美咲の眼鏡に適う物件は見つからない。

「あれは？」

日本橋。

「もつと」

金閣寺。

「ぜんぜん」

青函トンネル。

「地下じゃない」

警視庁。

「あと少し」

国会議事堂が見えてきた。

「これだ」

美咲は一人でうなずいた。

「キミたち止まりなさい」

片手に爆弾を持った美咲は当然のように警備員に囲まれるが、美咲は翔んだ。

「マテッ！」

宙を二、三步駆け上がると黒髪をたなびかせて美咲は翔び、それを警備員たちが追い掛ける。

「マツンダッ！」

けれど誰も追いつけない。

「トリオサエロッ！」

美咲は翔んでいるのだから。

「オウエンヲヨベッ！」

国会議事堂から百万の人間が溢れ出し、波となって美咲を襲う。百万の顔が黒い波頭のうねりをつくり、二百万の足が天地を呑み込む怒涛を鳴らし、一千万の指が万物を搦める飛沫となって、美咲の美しくなびく黒髪を、肉塊の波に引きずり込もうともがき出した。

伸びる二百万の腕の一千万の指の端が、美咲の髪をかすめるその間隙。

「うわあああああああああつ！」

オレは飛び込んだ。

オレは掴み掛かる二百万の腕と一千万の指とを振り払って美咲を守る。

二百万の腕がオレを殴り、一千万の指がオレを掴み、二百万の足がオレを踏み、二千八百万の歯がオレを噛み、百万の舌がオレを罵る。

「サカラウカ、サカラウカ、オノレノムリヨクサヲシツテイナガラ。ムノウ、ムノウ、オマエナドダレモアイテニシテイナイ。キヅケ、キヅケ、ムイミヲ、ムダヲ。オマエハナニモキメテハイナイ。オマエハナニモナシテハイナイ。ヒキヨウモノ、ヒキヨウモノ、ヒトノウシロシカアルケナイ、ムジカクナ、ムジカクナ、ムジカクナ、ニンゲンノナリソコナイ。カタラナイデスムベキカ。トラワレナイデスムベキカ。オマエハタダノニンゲンダ、エイユウニナドナレハシナイ。ジユウナハナドモテハシナイ」

抵抗するオレの腕は折れ、肌は裂け、肉はえぐり喰い千切られ、背骨は粉碎され尽くし、青く腫れ上がる顔のまぶたは眼球を血に染めて、赤く開けた世界の向こうに、国会議事堂に降り立つ美咲を見た。

柔らかくその頂に舞い降りた美咲の髪は、羽をたたむように静かに落ちる。

二百万の瞳に映る美咲の黒髪。

そしてすべてを見下ろした。

そしてすべてを見下した。

「ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ！」

百万の人間の沸騰が百万の悲鳴を吹き上げて、国会議事堂の頂へと四百万の手足を蠢き動かす。

嘲笑。

美咲は赤く吹き飛んだ。

オレは恍惚の余りに失禁していた。オレは感動の余りに脱糞していた。

美咲の爆発した光景は赤黒く燃えて、吹き飛んだ人間のガスが瓦礫とともに辺り一面に散乱し、百万の人間が逃げ惑ってぎゃーぎゃーと騒いでいる。

オレは震えていた。

彼女は雄々しく、美しかった。

最後になびくあの長い黒髪が、吹っ飛んで消えていく、あの瞬間。オレは涙と汗と、血と泥と、尿と糞便とにまみれながら、その一瞬の美しさに脳髓を奪われて、笑って、笑って、笑い抜いて、泣いて、泣いて、泣き抜いて、喜んで、喜んで、喜び抜いて、羨ましくて、羨ましくて、たまらなくなつた。

彼女は美しかった。

最高だった。

三角屋根の吹き飛んだ、国会議事堂が燃えている。

オレは羨望の眼差しで、人が死んだ瓦礫の山の阿鼻叫喚の炎に向けて、血に汚れた弱った手を必死に必死に求めて伸ばした。

そんな夢を見る。

汗にぐっしり濡れるシャツに、震える手だけが残っていた。

第十話「雪」

美咲が紙束を持ってオレの部屋にやってきた。

「何それ？」

「手伝って」

突然の美咲はオレの質問に答えもせずに勝手に部屋に上がるので、窓際でワガハイと日向ぼっこをしながらマフラーを編んでいた笹倉さんはびっくりして立ち上がった。

「誰？」

「お隣さん」

「邪魔だった？」

「マフラーを編むのは邪魔したみたい」

美咲は「ふーん」と言って笹倉さんの顔を見て、「邪魔してごめんね」と謝ったので、笹倉さんは「いえいえそんな、こちらこそお邪魔みたいで」と必死の否定に手を振った。

ワガハイはそんな二人をちよつと見て、興味ないなとまた眠る。

「あの、それじゃあこれで」

笹倉さんは編みかけのマフラーと眠るワガハイを強引に小脇に抱えて、そそくさと玄関に向かい、オレはそんな気を遣わなくてもいいよと言いながら玄関に見送ると、笹倉さんは予想通りの誤解をしていてくれた。

「もしかして彼女さんですか？」

「いや、悪友」

「え？」

「悪いお友達」

笹倉さんはいまひとつピンとこない表情で、それでも邪魔になりそうだということを感じて、自分の部屋に戻っていった。

「あの、ごめんなさいね。誤解されてたら、私ちゃんと説明しますから。その、頑張ってくださいね」

笹倉さんもだいぶ誤解しているが、ちゃんと説明するのも面倒なので、何も言わずにそのままに帰ってもらった。

「それでさ、秀雄くんに手伝って欲しいことがあるんだけど」

笹倉さんの危惧する誤解は美咲の胸にはなかったのか、居間に戻ると美咲は早速本題を切り出して、テーブルの上にビニール紐で縛ったチラシの紙束と三本のハサミを置いた。

「工作でもするのかよ」

「雪が見たくなったの」

「はあ？」

美咲の答えはエキセントリック過ぎて狙いがさっぱりわからない。

「田中くんも後で来るよ」

さて、何を頑張ることになるのだろうか。少なくとも笹倉さんの期待には応えられそうもない。

耳たぶが冷たい。

マンションの屋上。

美咲とオレと田中くんは、紙くずの詰まったゴミ袋を担いで、マンションの屋上に立っていた。

あの後オレの部屋に田中くんが「どうも」と言ってやってきた。

痩せ眼鏡で小さい声の田中くんは運転免許を持っていたらしく車に乗ってやってきて、トランクから大量のチラシの束とゴミ袋を降ろしてきた。

廃品回収からかっぱらってきたであろう紙の束が、部屋の中にドンと並ぶ。

「何だよ、これ？」

「雪」

早い話がこの紙束を細かく刻んで、高いところからばら撒きたいらしい。

「雪を降らすの」

オレはあまりのアホさに呆れながらも、さすが美咲と感心していると、美咲と田中くんは早速と作業に入り、テーブルを挟んで黙々とハサミを動かし紙束と格闘を始めたので、オレもハサミを手に持って、黙々とチラシを切り刻んだ。

黙々。

ただ紙を切る作業を延々と繰り返す。

延々。

ただ紙を切る作業を淡々と繰り返す。

淡々。

ハサミの音の繰り返し。

ジョキジョキ。

チラシの文字がばらされて、断片へと変わっていく。

大安売りが大安。

一九八〇〇円が八〇〇円。

新装開店大玉出しが玉出し。

牛肉ロース二〇〇グラムがス二〇〇グラム。

サイクロン掃除機がサイクロン掃除。

ハイビジョンテレビがジョンテレ。

新春特売セールがール。

ご奉仕品がご。

クー。

ポン。

券。

り。

んご。

プリン。

ター。

る。

す。

し。キ。色。は。2。保。へ。柄。り。塗。を。

ハサミをジョキジョキ動かし続けて「大感謝」をただの「感謝」にしていると、美咲がハサミを投げ出した。

「めんどい」

バリバリ。

ハサミに疲れた美咲はついにチラシを手で破き、グツシャグシャのビリビリのバリバリのバラバラに、チラシの文字は散り散りと互い分かれてくずとなる。

オレと田中くんも真似る。

グツシャグシャのビリビリのバリバリのバラバラ。

そんなわけで大量の紙くずが詰まったゴミ袋を担いで、オレたちはマンションの屋上に立っていた。

高気圧に包まれた、冬の空には寒さだけが吹いている。

手先のかじかみを擦りながら、オレはマンションの下を覗き込んだ。十三階建てのそのマンションは、地面に向かって垂直に落ちていき、下の歩道に行き交う人は、何も気付かずに日常を歩いている。これからここに雪が降る。

田中くんの顔は紅潮していた。

「大丈夫なのか、美咲」

「何が？」

「ゴミなんか撒き散らしたら、警察に捕まるだろう」

「大丈夫だよ。逃げれば」

「おいおい」

「それに撒き散らすのはゴミじゃなくて雪だもん」

「それもそうか」

雪はきれいだから許される。

まあ、実際のドカ雪はただの自然災害で、生活の不便といったらこの上ないが、降る雪に罪はないし、降る雪がきれいなことにも罪はないし、これはオレたちが作った雪で、降らすために作った雪で、だからきつときれいで、だから絶対許されなければならないのだった。

「どうやって降らす？」

オレはゴミ袋、ではなく雪袋の中の紙の雪を一握り掴んでみたが、その間に美咲は雪袋をバツとひっくり返して、その中身をぶち撒けた。

雪が降る。

紙の吹雪はドツと溢れ、溢れて散って、ハラと舞い、舞って踊って、地面に堕ちる。

田中くんが続く。

吹雪を見る田中くんの眼はキラキラと輝き、荒い息に震える手で雪袋の口を解き、袋を宙に投げ出す勢いで、空に向かって雪を飛ばした。

雪が降る。

オレも続いた。

雪が降る。

見下ろす視界は雪に満ち、インクの色 of 混じる吹雪は、ひとつひとつに個性を放ち、風に巻かれて飛んでいるのに、やがてみんな地に堕ちる。

雪は自由に堕ちていく。

「すごいです！ 最高です！ ははは、あははははっ！」

痩せ眼鏡の田中くんは雪の光景に興奮して絶叫し、笑いが止まらなくなっていた。

雪が堕ちる。

黒髪。

笑い続ける田中くんの横で、乱れる髪を直しもせず、美咲は小さく呟いた。

「冷たくない雪は理想だね」

見下ろす。

地面に散った紙くず。

マンションの下に騒ぎの広がる声が聴こえる。

「帰ろ」

素早く撤収しようとする、一枚の雪が目の前を飛んできて、書いてある文字が目に入った。

0円。

オレは思わずフツと笑った。

第十一話「誤解とかなんとか」

アホな思い付きの犯罪は、何とかあの場を脱出して、どうにか部屋で一息つくと、翌日のテレビのニュースに取り上げられて、「謎の紙吹雪、目的は何だ！」と世間の好奇を集めていた。

取材を受けるマンションの住人や近所の通行人は、「誰がこのゴミを片付けるんだ」と憤慨のコメントや、「変な事件も増えましたね」と無関係者のコメントを口にしていた。

全体的には否定的な報道で、他人の迷惑を考えると主張していたが、特に人が死んだわけでもないのに、話題はすぐに先週発生したバラバラ殺人事件の続報に移っていった。

二分三十七秒。

こんなもんか。

それでいいような気もしたし、それじゃダメなような気もした。どっちの気もするなら、どっちでもいいんだろう。

笹倉さんのマフラーがもうすぐ完成するという。

「あの、でも私のマフラーなんかもらって大丈夫なんですか？」

笹倉さんは相変わらず誤解をしていたので、「気を遣わなくていいよ」と笑って、「楽しみにしてるよ」と言っておげた。

そういえばもうすぐバレンタインデーだ。

「彼、もうすぐ帰ってくるんでしょ？」

笹倉さんは薄く頬を染めてうなずく。

「バレンタインの日です。チョコレートも作りますよ。梶井さんの分も作る予定です」

「義理チョコかあ」

「感謝チョコですよ。誤解されないような小さいですけどね」

笹倉さんはかわいく笑う。

誤解。

この世に誤解でないことなんてあるのだろうか？

少なくともオレには正解なんてわかりやしない。

大きく育った誤解の種が、バレンタインの日に花を咲かした。

笹倉さんの彼氏が殴り込んできた。

「出てこい、コノヤロー！」

「ちよつと、やめて！」

大きな音に開いた玄関に初めて見る笹倉さんの彼氏は、オレより少し背の低い金髪頭の男で、子犬のようなかわい顔に怒気を浮かべて、オレの胸倉に掴みかかってきた。

「おめえ、ヨリコのなんなんだよっ！」

「やめてったら、シヨウくん！」

胸倉を掴む彼氏の名前は確か霧島翔太で、笹倉さんにあれこれ相談されてどんな奴かは想像していたが、思った以上に直情径行の笹倉さんの彼氏は、強い口調で当然の疑問をぶつけてきた。

「だから梶井さんとは、そんなんじゃないったらっ！」

「じゃあ、なんでマフラーなんか編んでんだよっ！ 答えろよっ！」

「だから言ってるでしょ？ 普段いろいろお世話になってるお隣さんだから、そのお礼よ」

「それで手作りのマフラーなんて作るかよ！」

バレンタインに彼女の部屋を訪れた彼氏は、そこにオレのマフラーを見たらしい。

「おんなじ色で」

余りの毛糸だから当然だ。

「手作りチヨコまで付けて」

手作りチヨコも見たらしい。

「メシまで作ってやるなんて、なんでそこまでするんだよ！」

ご馳走になっています。すいません。

「おまえ、オレとコイツと二股掛けてんだろっ！」

彼氏は当然の邪推から、とてもひどいことを言う。

「いつも、お隣さんや猫の話をしゃがって」

誤解の鬱積。

「オレはおまえのなんなんだよ！」

彼氏の顔は不安に揺れた。

「違うって言うてるでしょ」

笹倉さんは泣きそうだった。

「ただのお隣さんで、一人暮らしで寂しいときに話しをしてくれて、それで嬉しくて、お兄ちゃんみたいに優しくかったから、だから、だから」

笹倉さんは妹で、オレは笹倉さんのお兄ちゃん。

「それだけで済むような男なんているわけねえだろっ！」

笹倉さんはかわいいかわいい赤頭巾で、オレは怖くて危ないオオカミ男。

彼氏の誤解の根は深い。

笹倉さんはブンブンと首を振る。

「梶井さんはそんな人じゃない！ それに梶井さんにはちゃんと彼女がいるんだから、私なんか相手になんかしてないよ！」

笹倉さんの誤解は未だに続いていて、それがさらなる誤解を招く。やっぱりちゃんと話しておけばよかった。

「てめえ、ヨリコに二股掛けやがったな！」

彼氏の右ストレートがオレの顔面を捉えた。

「てめえ、よくもヨリコを！」

彼氏のパンチは背が低いからか、意外と軽くてダメージは少なかったが、それでも連続でバカボコ殴る彼氏の目には涙が浮いていて、赤く腫らした顔を隠しもせずに逆上に体重の乗らないパンチを繰り返す彼氏のさまは、オレに罪悪感呼び起こしたが、笹倉さんが「やめて、やめて」と言い続ける中にも止まらない暴力に、いい加減耐えるのがバカらしくなったオレは、足を踏み込んだ右フックで彼氏をアゴから吹き飛ばした。

「ショウくん！」

彼氏は玄関のたたきにひっくり返って泣いていて、それを笹倉さんが助け起こすと、笹倉さんはオレをキッと睨んだ。

「殴るなんてひどいです」

その眼は本気で、それは笹倉さんの本気で、彼氏の涙も本気で、殴られて睨まれたオレだけがなんだか取り残された感じで、それだから二人は大丈夫だとオレは思った。

「とりあえず、話し合おう」

居間のテーブルを三人で囲み、誤解の要点をまとめた上で、今後の付き合い方について話し合った。

「まず、翔太くんはオレと笹倉さんの仲を邪推しているみたいだけれど、それは違うということ」

「けれど、オレと笹倉さんの関係に誤解を生む要素があったことは事実なので、今後ご飯を作ってもらったり、一緒に食べたりするような行為はやめることにする。またバレンタインのマフラーとチョコレートは受け取らない」

「翔太くんはバイトに忙しいみたいだけれど、それに笹倉さんは寂しがっているので、これから一緒に過ごせる時間を増やすよう努力すること。お金がないなら奨学金を狙ってみること」

「笹倉さんがワガハイに会いたいときは二人で来るようにすること。二人で来れない場合は、笹倉さんは翔太くんに必ず連絡を入れること」

「猫に会いなんか行ってもらいたくない」

「翔太くんは笹倉さんの猫好きを認めて嫉妬しないこと」

「猫よりも愛されたい」

「猫ごと愛せる男になれ」

「動物が苦手」

「好きになれ」

「どうすればいい」

「猫を飼え」

「猫が怖い」

「猫と一緒に笹倉さんと同棲してしまえ」

「いきなりの同棲で大丈夫？」

「愛があれば何でもできる。ラブ・イズ・ＯＫ。愛は勝つ」

最後に笹倉さんはオレのために作ったマフラーとチョコレートを
見せて訊いてきた。

「このマフラーとチョコレート、どうしましょう？」

「お兄さんに送るといいよ」

笹倉さんはうなずいた。

「仲良くやれよ」

「殴ったりしてすみませんでした」

頭を下げる翔太くんは、怒りが引けば礼儀正しく純粋な、かわい
い犬顔の少年だった。

「ありがとうございます」

笹倉さんと翔太くんは何度も何度もお辞儀して、隣の部屋に帰っ
ていた。

隣の部屋に穏やかな声を聴く。

「はあー」

疲れた。

そういえば笹倉さんの美咲とオレの仲に関する誤解を解くのを忘
れていた。

まあ、いいか。

庭にワガハイが歩いていた。

「おまえがこの庭を通るからだぞ」

ワガハイは「ニヤー」と鳴くと、「そんなことよりメシはどこだ
？」とオレの足に擦り寄ってきた。

オレはネコ缶を開けてやった。

第十二話「どうでもいい」

少しトラブルイベントの続いた二月も半ばを越えれば本格的な就活シーズンで、来年度新卒採用者の群れの中に混じり、うるちよろと企業説明会の間をさまよって、社会は厳しいから将来像を思い描いて努力しない人間はクズになると洗脳されかけていたオレに、さなるトラブルが舞い込んで、オレは夜の山林を歩いていた。

わずかな月の明かりの空に伸びる杉枝が網を掛け、オレの歩く足音は空に届かず時折耳をかすめる風の音に遮られる。春に近い二月の終わりの気候も山の夜は寒さに沈み、肩を抱く指の先はかじかみに震えていた。

「バカ野郎」

オレは信じていた。

「バカ野郎」

オレは信じようとしていた。

「バカ野郎」

オレは信じなければならなかった。

「助けて」

美咲から電話があつたのは、企業説明会に向かう途中の電車の中のことだった。

何事かと訊き返すと、電車の音に途切れ途切れの電話の向こうに美咲はとんでもないことをのたまった。

「田中くんの車で集団自殺に行ったんだけど、途中で断わったら帰れなくなっちゃった」

電波が切れた。掛け直した電話は圏外のようなだった。

この日ほど、美咲をバカだと思ったことはない。

オレは説明会を蹴っ飛ばし、電車を乗り継ぎ乗り継いで、一県を跨り越えて美咲に言われた場所に着くと、そこは山を背に負う小都市だった。

着いた頃には夕方が近づいて、山は徐々に闇をたくわえ始めていく。

オレは駅に自転車を見つけると、鍵を叩き壊してかっぱらい、山につながる林道に向かってこいだ。街の中は当然圏外ではない。携帯電話が圏外になりそうな山林を自転車で探す、体力はそれに追いつかない。

上る坂道。

「はあ、はあ、はあ」

バカ野郎。

「くっ」

バカ野郎。

「そっ」

バカ野郎。

「どういう」

斜陽。

「つもりだっ」

見つからない。

「あのっ」

見つかるわけがない。

「ばかっ」

こんな、無闇な。

「ぐっ、はっ」

どうする？

「はあ」

どうすればいい？

「はあ」

オレは、なんで、こんな。

「はあ」

夕闇。

「んっ」

苦しい。

「ぐっ」

なんでこんな。

「はっ」

バカ野郎。

「くそつたれっ！」

坂を越えた。

「はあっ！」

林道の脇の黒影に駐車する二台の車。

田中の車。

「はあ、はあ、はあ」

道路の脇から山に向かって獣道が続いている。

足跡。

スーツのオレは、紫色に染まる空に夜を迎える山の闇へ、革靴で踏み入った。

高校の修学旅行。

定番の京都へ向かう新幹線の車内で、オレの隣に座る美咲は窓の景色を眺めていた。

「きしめん」

名古屋でそう呟いた美咲は、次の日の班別自由行動で名古屋にいた。

美咲は変人だった。

友達のいない美咲は強制的な割り振りでオレと一緒にの班になり、班長になったオレは美咲の隣の席に座った。

「名古屋に行ってくるね」

自由行動の計画を無視して平然とそう言ってのけた美咲とオレは一緒に名古屋にいた。

きしめんを食べる。

快感だった。

「名古屋駅で看板が見えたの。だから食べてみようと思ったんだ」
そしてまた京都に戻る。

「おいしかったね」

振り向く黒髪の広がり。

美しく、艶やかに、汚れてはならず、触れてはならない、美咲の黒髪。

それからオレは美咲の黒髪に憧れ続けた。

山林の奥に隠れた古い別荘らしき廃屋に飛び込むと、大量の練炭の置かれた部屋に美咲を囲んで田中と他に四人の男女が座っていて、突然の闖入者に驚くこいつらを横目にオレは美咲の手を掴んで夜の山林に逃げ出した。

「秀雄くん」

「このバカッ！」

この声に田中が反応した。

「逃がしやしない」

誰より先に立ち上がった田中は、オレたちの後を追いつけ山林を走り、美咲のなびく黒髪に手を伸ばして、その指が黒髪に届こうとするその間隙。

「美咲さん……うわっ」

オレは田中に飛び掛かった。

「てめえが、このバカがつ！」

田中の二本の腕をかくぐつて足に組み付き薙ぎ倒し、暴れる田中をマウントポジションに組み敷いて田中の顔面を往復で殴ると、田中の血がコブシに付いた。

「この、くそガキ！ くそガキ！」

ゴス。

ガス。

ゴス。

「はぁ、はぁ」

抵抗を失った田中に唾を吐き掛け解放し、再び美咲の手を引いて走り出すと、眼鏡が飛んで顔のひしゃげた田中の切れた口からこぼれる血が、飛沫を上げてオレと美咲の背中に声と飛んだ。

「あなたはボクと一緒に死ぬべきだ！ あなたの美しさを知るボクと、その美しさを理解しないこんな世界から脱出するんだ！ 待ってくれ！ 待ってくれ、美咲さん！ 置いていかなくてくれ、美咲さん！」

田中はそれでも立ち上がってオレと美咲の後を追おうとしたが、夜に紛れたオレたちを追跡することはできなかったようだ。周囲に人の気配がなくなつて、オレと美咲はそこでようやく息をつくことができた。

「ありがとう」

「バカ野郎！」

オレは美咲を怒鳴りつける。

「何が集団自殺だつ！ 心配掛けさせやがって！」

「ごめん」

「ごめんで済むかつ！」

「ごめん」

美咲が何度も何度も謝るので、次第にオレも怒りの言葉を失つて、謝る言葉もなくなつて、沈黙が訪れると、美咲の瞳がオレの瞳の揺れるのを見つめていた。

「泣いてるの？」

闇の深さにわずかに光る美咲の瞳は、オレの瞳の濡れるのを指で触れて確認し、濡れた指先を舌で舐めて、「しょっぱいね」と呟いた。

オレは本気で泣いていた。

美咲が生きていてくれたから。

だから美咲に掛ける言葉も本気の涙に濡れていた。

「よかった……」

美咲は黙って涙を拭いてくれて、オレの気持ちが落ち着くまで拭いてくれて、オレの声の震えがようやく止まると、美咲はオレの質問に答えてくれた。

「なんで自殺になんか行っただよ」

「田中くんがね、集団自殺に行こうって言ったの」

美咲はいつもの調子でとんでもないことを淡々と話す。

「自殺する人って、どんな人たちか見てみたかったの」

ある老人は介護をしていた妻に先立たれたと言う。

あるおじさんは潰した会社の借金で首をくくらねばならなくなっただと言う。

ある少年は居場所がないために死ぬと言う。

ある少女は生きる理由が見つからないために死ぬと言う。

ある青年は人間の醜さと愚かさに見限られて愛想が尽きたために死ぬと言う。

「ボクたちはこんなくだらない世界から自由になるんだ」

自殺志願者サイトを開いて、バブルに売れ残って廃屋となった別荘に彼らを集めた青年の田中は、みんなの主張を総括してそう宣言した。

「え？」

その宣言に美咲は疑問を口に差し挟む。

「自由になっちゃうの？ それじゃ自由じゃないじゃん」

田中くんはそのとき何を言われたのかわからなかったのか、かなりマヌケな顔をしたらしい。

「やめた」

「は？」

「自殺」

一人では死ねないから集まった面々は、だから一人でも「生きる」と言われると途端に動揺を広げたが、死ぬと決めてここまで来た手

前、「気持ちが揃わなかったからまた次の機会にしましょう」と今更中止にすることもできず、かといって一人だけ生きて帰るとなるに残った奴の自殺の決心が鈍るので、美咲が帰るのを黙って見過ごすこともできず、結局みんなで仲良くあの世に旅立つためにいかに死ぬことに意義があるかの説得を、延々と美咲に向けてすることになってしまった。

田中を始めとする五人の自殺志願者は、「生きていたっていいことは何もない」とか、「年齢を取れば身体も思うように動かなくなる」とか、「死ぬなら若くてきれいなうちだ」とか、「老いの衰えは本人にも、周囲の人にもつらいものなんだ」とか、「生きれば生きるほど人間一生金に追われて人生が尽きるということがわかるんだ」とか、「人は他人の不幸を喜んで暮らすんだ」とか、「みんな最後にはどうせ死ぬんだから自殺も自然死も変わらない」とか、「少子高齢化に地球温暖化、資源の枯渇に人口爆発、食糧不足に水不足等、問題は山積みで人類の将来に希望なんて欠片もないんだ」とか、「人は所詮みんな一人なんだ」とか、「みんな自分がかわいいから、本当に困ったときは、誰も助けてなんかくれない」とか、「人は人を殺すんだ。こんな醜いものが他にあるか」とか、様々な説得で口々に美咲に迫る。

けれど美咲は首を縦に振らない。

「自殺をするのにも理由がたくさんいるんだね」

この長丁場の議論に疲労が溜まった自殺志願者の面々は、一時休憩を入れてからもう一度美咲を説得することにして、渴いた喉を潤すためにみんなで揃ってお茶を買いに一度山を下りたのだが、その合間に美咲はオレに電話を掛けてきたらしい。

マヌケな話だ。

それで午前中に集まったにもかかわらず、日が暮れてもダラダラと説得を続けていたところに、オレが突入してきて美咲を助け出したということらしい。

「なんでこんなに自由じゃないんだろう」

暗闇に呟く美咲の声は悲しみに満ちていた。

「何ものでもない何かになりたいのに」

黒髪は闇に溶け、美咲の瞳だけが夜を見上げる。

「自由ってなんだろう」

言葉は不自由だった。

「もういいよ」

「えっ？」

「もういい」

俺の指が美咲の髪を捕らえ、俺の腕が美咲の背中を抱いた。

「好きだ」

俺がこいつのことを好きだということは、もうだいぶ前からわかっていたことで、ただそれを言葉にしなかったただけなんだが、言葉にするとそのことがこうもはっきりと意味を持ち、こうもあからさまで露骨であけすけでいとおしいものになるなんてことは思いもしなかったし、想像することもできなかった。

俺は美咲を捕まえて、俺の言葉で女に変えて、俺は男になって、美咲の身体を抱きしめる。自由な美咲はそこにはいなく、自由からすら自由であろうとした美咲はそこにはいなく、あたたかい熱だけがそこにあつて、意味に埋まった男と女だけがそこにいて、そのすべてが俺を動かし、そのすべてで俺は動いた。

そしてどうでもよくなった。どうでもよくなったのだ。もう、どうでもいいのだ。どうでもいい。どうでもいいのだ。だから女の胸に顔をうずめ女の肌に指を走らす男の舌は女の唇を強くふさぎ、女の手が男の頭を抱いたので、男は最後まで最後まで女を抱きしめ離れなかった。

「また泣いてるの？」

女の声に頬を濡らす男の心は、罪悪感と幸福感に壊れながら、それでも優しく女の髪を撫でていた。だから女は男の涙を優しく舐めて、小さく笑ってこう言った。

「あたしも好きだよ」

男も小さく笑った。

「もう、どうでもいい」

「うん」

二人だけだった。

不自由な言葉は、それだからこそ安易で、それだからこそ強靱で、それだからこそあたたかく、それだからこそ抱きしめ続けていたかった。

第十三話「安易だから強靱なのだ」

一夜を明かして山を下りた俺と美咲は、集団自殺のことを地元の警察に通報した。その後、警察はすぐに林道に不審車両を見つけ、それとともに廃屋に集まっていた集団自殺の参加者たちを発見した。俺の登場に混乱した自殺志願者たちは、自殺のタイミングを失って、これからまた練炭自殺に挑戦するかどうか議論したが、主催者である肝心の田中が美咲に逃げられたショックと俺にボコボコにされた怪我からあまり議論に参加せず、そのため結論が出ないでいたところに警察がやってきて、そこで全員無事保護となったらしい。

この集団自殺未遂事件は、事件が未遂で、しかも練炭を大量に集めておきながら、それを自殺に使わずに、暖房に使って一晚を過ごしていたマヌケさから、世間に深刻に受け止められなくて報道もほとんどされず、警察に「悩み事があるなら、こういったところに相談に行くんだぞ」と弁護士事務所や心理カウンセラーを紹介された上、「生きていればいいこともあるさ」と励まされてみんなそれぞれに帰っていったそうである。

ただ田中だけは、俺にボコボコにされたので、事情としては俺の正当防衛であるが、過剰防衛ではないかという警察の指摘から、傷害事件として立件されそうになったが、田中が起訴を望まず、俺と三咲に「すいませんでした」と謝ったので、このことも世間の日に当たることなく終わっていった。

聴取を受けた俺と美咲もその日のうちに解放された。

「疲れた」

警察署を出ると、高い空に春の風がそよいでいた。

「スーツがぼろぼろだ」

野山を駆けずり、格闘までした俺の上下はしわと埃にだいぶくたびれていた。

「ごめんね」

謝る美咲の服もだいぶんにくたびれて、その黒髪も埃に艶を失っていた。

「もついいよ」

美咲は警察署を振り返る。

「田中くん大丈夫かな？」

「たぶん大丈夫だろ」

練炭自殺なんてベタな真似をする田中は、一人では翔べなくて、だから美咲に憧れたのだが、それは田中の誤解だった。

美咲は最初から翔ぶことへも堕ちることへも興味なく、ただ浮いているだけだった。

俺と同じ誤解だった。

だから美咲の髪にちゃんと触れれば、美咲はちゃんと応えてくれる。

美咲の唇はやわらかい。

「好きって言われると嬉しいね」

かわいい女の子の美咲の笑顔は、はにかみにほころんで、俺が美咲の手を握ると、美咲は俺の手を握り返し、顔を合わせると、お腹の音が大きく鳴った。

「お腹空いたね」

「ここの名物料理は何かかな？」

二人で食べるご飯はきつとおいしいはずだ。

部屋に戻ると三月だった。

三月の日常は、自殺未遂事件帰りの俺と美咲をちゃんと放さず捕らえ直してくれていて、俺と美咲は二人揃って就職活動と恋愛活動に日々の精を尽くしていた。

木島は三社も内定が出たとかかんとかうるさいことを言い、美咲も物怖じしない性格が評価されたのか、結構簡単に面接をパスして

もうすぐ最初の内定を出しそうで、俺は少し焦ったが恋愛活動は順調で、美咲の肌から伝わるぬくもりと相変わらぬすつとぼけた行動に、就職活動の元気をもらって、俺は今日もスーツをまとうて元氣よく扉を開ける。

玄関を出ると笹倉さんが掃除をしていた。

「あつ、梶井さん。おはようございます」

お隣の恋愛活動もなかなか順調らしい。

笹倉さんと翔太くんは猫を飼える物件を見つけたので引越しの準備を始めていて、翔太くんの動物ならしに、毎日ペットショップへ通っていた。

「猫って案外かわいいんですね。こうネコパンチして」

猫慣れした翔太くんは笹倉さんとの会話も弾んで日々は充実していると、アドバイスをしてあげた俺に感謝の言葉を述べていた。猫は新居に移ったら、もらえる仔猫を探す予定だそうだ。

「頑張ってくださいね」

「おう！」

今日の会社は「人の役に立つ」がモットーの熱い社長のいるなかなか印象のいい会社で、説明会のときにした質問にはだいぶ手応えを感じていた。

なーに、やってやるさ。

今の俺は充実している。

四月になった。

桜が咲いた。

内定が出た。

四年生になった。

笹倉さんは翔太くんと同棲を始めた。

田中也大学に復帰した。

木島が留年した。

ワガハイが庭に本格的に住み着いてきた。

俺と美咲は春の公園を散歩していた。

「美咲、もしさ、爆弾を持ってたらどうする？」

俺は美咲にくだらない質問をする。

「爆発させる」

美咲の返事はすぐだった。

「どこで？」

「うーん。こういう公園とかかなあ」

「国会議事堂ってどう？」

「いいね、それ」

「あの三角屋根が吹っ飛ぶんだ」

「ゴジラも潰してたよね」

「グツチャリな」

「いいなあ、敗戦国みたい」

「そうだなあ、敗戦国だなあ」

「爆発したら勝ちかな」

「そりゃあ勝ちだろ」

そこで美咲が「じゃあやろう」と言うのは夢の話で、美咲も俺も爆弾なんて持つてなくて、頭の中で言葉だけの国会議事堂を言葉だけの爆弾で吹き飛ばしただけだった。それでも吹っ飛んだ国会議事堂の瓦礫の山から、春に目覚めるカエルのように国会議員が這い出てきて、右往左往に慌てるさまはなかなか愉快に痛快に、俺と美咲は笑い合った。

「そうだ美咲、髪切れよ」

「なんで？」

「春だしさ」

「うーん」

「それにシヨートの美咲も見てみたい」

「じゃあ、切ってみようかな」

「軽くなるぜ」

「うん」

それですぐに近くの美容院に入った美咲は、肩までに切られた髪をふわりとさせて、俺が髪に触れてみると、美咲は上目遣いに「似合うかな？」と訊いてきた。

「最高」

美咲はちょっとはにかんで、ゆっくりと視線を合わせて、微笑んだ。

「好きになってくれてありがとう」

俺は最高の彼女を抱きしめる。

美咲の唇は何度触れてもやわらかい。

最高だ。

第十三話「安易だから強靱なのだ」(後書き)

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

えー、これは数年前、就職活動中の現実逃避に書いた作品です。
この突然の急展開と安易なラストは「いつまでもこんなものを書いている場合ではない」という作者の焦りの表れです。おかげさまで今はなんとか定職に就いております。彼女はおらんが。ふうっ(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2288n/>

最高の彼女

2011年5月14日08時25分発行